

Sexual Preference as Cognitive Architecture: A Unified Theory of Domestic Violence, Fertility Collapse, and Intergenerational Transmission through Tense Processing Deficit

性癖は認知の形である:時制処理欠如によるDV・少子化・世代間転写の統一理論

Viorazu.

Abstract

"There exist men who are repelled by intelligent, beautiful women." This observation constitutes a question about the cognitive architecture of domestic violence perpetrators.

This paper redefines mate preference as "sexual preference (seiheki)" and proposes that sexual preference is a form of cognition, not taste. Mate preference is composed of four variables—intelligence, economic capability, mental stability, and physical appearance—each representing not the partner's attributes but the evaluator's cognitive capacity. The combination of four variables \times two states (cognizable / non-cognizable) yields 16 patterns. Two evaluation functions operate on these 16 patterns: the normal type, which values \circ (cognizable) positively, and the inverted type, which values \times (non-cognizable) positively. This produces 32 types per sex, totaling 64 mate preference types.

Of these 64 types, only three (M1, M5, F1) demonstrate high reproductive viability, and only two viable pairings exist. The gatekeeper variable across all four dimensions is mental stability: when mental stability is × (non-cognizable), reproductive viability, Dark Triad severity, and tense processing capacity are all compromised.

The root of cognitive deficit in the inverted type is tense processing deficit. Tense processing is defined as the capacity to integrate past, present, and future into a unified cognitive frame. Its absence drives a closed cycle: tense processing deficit → static cognition → four-variable cognitive deficit → evaluation function inversion → reproductively incompatible pairing → domestic violence → transmission to children → intergenerational transfer → tense processing deficit in the next generation.

Grammatical analysis of 83 phrases commonly used by DV perpetrators demonstrates that patterns of syntactic breakdown—subject deletion, causal inversion, past invalidation—precisely correspond to the stage at which tense processing has arrested. The perpetrator's broken syntax destroys the victim's tense processing, functioning as self-blame induction, violence glorification, and gaslighting. This syntactic destruction constitutes the linguistic mechanism of intergenerational transmission.

Paternity is not instinct but an emotion generated by labeling the somatic response to pregnancy notification as "joy"—a product of tense processing. The social absence of the paternity label causes structural mislabeling of this somatic response.

Tense processing capacity is acquired across nine developmental stages aligned with grammatical maturation.

However, the current Course of Study (National Curriculum Standards) for Japanese Language Arts contains no systematic training for tense processing. This paper proposes: integration of syntax construction training into compulsory education, early detection of arrest stages through quantitative analysis of syntactic patterns in student writing, and social provision of the paternity label.

Domestic violence, fertility decline, regional variance in abortion rates, intergenerational transmission, and Dark Triad manifestation are all secondary phenomena derived from tense processing deficit. What is needed is not budget, but language.

Keywords: mate preference, four-axis cognition, evaluation function, inverted type, tense processing, domestic violence, Dark Triad, reproductive viability, intergenerational transmission, syntax training, paternity, Maiesiophobia

要旨

「賢い美人に萎える男がいる」——この観察はDV加害者の認知構造への問いである。

本論文は配偶者選好を「性癖」と再定義し、性癖とは嗜好ではなく認知の形であると提唱する。配偶者選好を構成する変数は知性・経済・精神・外見の4つであり、それぞれは相手の属性ではなく評価者の認知能力の指標である。4変数×2状態（認知できる／できない）で16パターン。この16パターンに対し、○（認知可能）を高く評価する正常型と、×（認知不能）を高く評価する反転型の2つの評価関数が作用する。男女各32種、合計64種の性癖類型が生成される。

64種のうち繁殖可能性が高いのは3種（M1・M5・F1）のみ、成立するペアリングは2通り。4変数すべてを貫くゲートキーパー

は精神であり、精神が×のとき繁殖可能性・ダークトライアド重症度・時制処理能力のすべてが毀損される。

反転型の認知欠損の根は時制処理欠如である。時制処理とは過去・現在・未来を一つの認知枠に統合する能力と定義する。その不在が閉じたサイクルを駆動する。時制処理欠如→静的認知→4変数認知欠損→評価関数反転→繁殖不適合ペアリング→DV→子への波及→世代間転写→次世代の時制処理欠如。

DV加害者が常用する83のフレーズを文法分析すると、構文の崩壊パターン——主語消失・因果逆転・過去の無効化——が時制処理の停止段階と正確に対応する。加害者の壊れた構文は被害者の時制処理を破壊し、自責誘導・暴力美化・ガスライティングとして機能する。この構文破壊が世代間転写の言語的メカニズムである。

父性は本能ではなく、妊娠告知時の身体反応に「喜び」というラベルを貼ることで生成される感情であり、時制処理の産物である。父性ラベルの社会的不在がこの身体反応の構造的な誤ラベリングを引き起こしている。

時制処理能力は文法の成熟に沿った9つの発達段階を経て獲得される。しかし現行の学習指導要領（国語科）には時制処理の体系的訓練が存在しない。本論文は以下を提案する。義務教育への構文構成訓練の統合、児童の作文における構文パターンの定量分析による停止段階の早期検知、父性ラベルの社会的事前提供。

DV、少子化、中絶率の地域差、世代間転写、ダークトライアドの発現はすべて時制処理欠如から派生する二次現象である。必要なのは予算ではない。言葉である。

キーワード：配偶者選好、4軸認知、評価関数、反転型、時制処理、DV、ダークトライアド、繁殖可能性、世代間転写、構文訓練、父性、Maiesiophobia

第1章 出発点:DV文脈からの問い

「賢い美人に萎える男がいる」

この観察から本理論は始まった。

DV（ドメスティック・バイオレンス）の被害経験を持つ女性たちの語りには、ある共通点がある。加害者は交際初期に被害者の知性、精神的自立、外見的魅力に惹かれたように見えた。しかし関係が深まるにつれ、まさにそれらの要素が攻撃の標的になった。「お前は頭がいいから可愛げがない」「お前みたいな女は生意気だ」「誰のおかげで生活できてると思ってる」。惹かれたはずのものを壊しにかかる。

従来のDV研究は、暴力の形態分類、被害者の心理、加害者の更生プログラムに集中してきた。被害者支援は「逃げる方法」を中心に組み立てられ、加害者研究は「怒りのコントロール」を軸にした。しかし、なぜ特定の女性が標的になるのかという問いに対して、加害者の認知構造から体系的に回答した研究はほとんどない。

「賢い美人に萎える」という現象は、単なる個人的嗜好ではない。ここには認知の構造がある。相手の知性を認知できるか。経済的自立を認知できるか。精神的安定を認知できるか。外見を動的な変数として認知できるか。何を認知できるかが、何に惹かれ何を拒絶するかを決定する。

本論文は、配偶者選好を「性癖」として捉え直す。性癖とは性的嗜好の俗称ではなく、認知の形である。相手の何を認知できるかという4つの変数の組み合わせが、その人間の性癖を規定する。この枠組みから、DV、少子化、中絶率の地域差、世代間転写を統一的に説明する理論を構築する。

本論文は、この問いに対して「性癖とは認知の形であり、その根は時制処理にある」という回答を提示する。

第2章 認知の4軸

配偶者選好を構成する変数は4つある。

知性・経済・精神・外見。

この4変数は相手が持っている属性ではない。評価者が認知できるものの指標である。知性の高い相手を「知性が高い」と認知できるかどうかは、評価者側の認知能力に依存する。認知できないものは評価軸に載らない。評価軸に載らないものは、存在しないのと同じである。

4変数をそれぞれ定義する。

知性とは、相手の思考能力・判断力・問題解決能力を認知できるかどうか。知性を認知できる人間は、相手の意見、論理、言葉の選び方から知的水準を読み取る。認知できない人間は、相手が何を言っても「うるさい」「生意気」「理屈っぽい」としか処理できない。

経済とは、相手の経済的自立・経済的能力を認知できるかどうか。経済を認知できる人間は、相手の職業、収入、資産形成能力を「自分と対等かそれ以上の経済主体」として認知する。認知できない人間は、相手の経済力を「自分への脅威」か「利用可能な資源」としてしか処理できない。

精神とは、相手の精神的安定性・情緒的成熟・自己制御能力を認知できるかどうか。精神を認知できる人間は、相手の感情の安定、ストレスへの対処、人間関係の維持能力を読み取る。認知できない人間は、相手の精神的安定を「退屈」「つまらない」「刺激がない」と処理するか、あるいは「不安定さ」に惹かれる。

外見とは、相手の外見を動的な変数として認知できるかどうか。ここが最も重要な定義上の区別となる。外見^oが生物学的に意味するものは「現在妊娠していない女性」である。ウエストとヒ

ップの比率は繁殖可能性のシグナルとして機能し、ウエストが細い状態は「現在妊娠しておらず、今から繁殖が可能である」ことを示す。外見への選好は、この繁殖可能シグナルへの反応である。外見の認知には2種類ある。静的認知と動的認知。静的認知は「妊娠していないシグナル」への固着であり、外見を固定値として処理する。「今この瞬間の見た目」だけが評価対象になる。妊娠によってシグナルが消えた瞬間に、対象への興味を失う。動的認知は外見を時間軸の中で変動する値として処理する。妊娠による外見変化を「繁殖シグナルの一時的変動」として認知し、同一人物の時間的連続性を維持できる。妊娠、加齢、病気、回復。外見が変動しても「同一人物の一時的な状態」として認知できる。静的認知しかできない人間にとって、妊娠による体型変化は「繁殖可能シグナルの消失」であり、それは「好きだった要素の消失」と同義になる。

この4変数はそれぞれ○（認知できる）と×（認知できない）の2状態をとる。4変数×2状態で16パターンの組み合わせが生じる。

表1：16パターン基礎表

	知性	経済	精神	外見
1	○	○	○	○
2	○	○	○	×
3	○	○	×	○
4	○	○	×	×
5	○	×	○	○
6	○	×	○	×
7	○	×	×	○
8	○	×	×	×
9	×	○	○	○
10	×	○	○	×

	知性	経済	精神	外見
11	×	○	×	○
12	×	○	×	×
13	×	×	○	○
14	×	×	○	×
15	×	×	×	○
16	×	×	×	×

パターン1（知性○経済○精神○外見○）は全変数を認知できる。パターン16（知性×経済×精神×外見×）は何も認知できない。この間に14パターンが存在し、認知できるものとできないものの組み合わせがそれぞれ異なる。

4変数の中で最も特殊な性質を持つのが精神である。知性は教育で向上する。経済は収入で変動する。外見は加齢や健康状態で変化する。しかし精神の認知には、評価者自身の精神が安定していることが前提になる。精神×の人間は、相手の精神○を認知できない。認知できないだけでなく、相手の精神的安定を「退屈」「冷たい」「つまらない」と誤認する。精神は認知の前提条件であり、他の3変数とは質が異なる。この性質が、後章で精神をゲートキーパーと呼ぶ根拠となる。

この16パターンが、以降の全分類の基礎単位となる。

第3章 評価関数——正常と反転

同じ16パターンを見ても、○を高く評価する人間と×を高く評価する人間がいる。

パターン1（全○）の女性を前にしたとき、「素敵な人だ」と感じる男性と「生意気だ、可愛げがない」と感じる男性がいる。両者は同じ女性を見ている。違うのは評価関数である。

正常型の評価関数は、相手の○を高く評価する。知性○を「賢い、尊敬できる」と処理し、経済○を「自立している、頼もしい」と処理し、精神○を「安定している、安心できる」と処理し、外見○を「魅力的だ」と処理する。正常型にとって○は歓迎すべきものであり、相手の○が多いほど評価が高くなる。

反転型の評価関数は、相手の×を高く評価する。知性×を「素直、可愛い」と処理し、経済×を「俺がいないとダメ、守ってあげたい」と処理し、精神×を「放っておけない、俺が必要だ」と処理し、外見○を「価値がある」と処理する。反転型は相手の○を脅威として認知する。知性○は「偉そう、生意気」。経済○は「俺より上、ムカツク」。精神○は「隙がない、つまらない」。相手の○が多いほど脅威が増し、相手の×が多いほど安心する。

反転型がなぜ×を歓迎するのか。相手が×であれば、自分が優位に立てるからである。知性×なら言い負かせる。経済×なら逃げられない。精神×なら支配できる。反転型にとって相手の×は支配可能性の指標であり、相手の○は支配不能の警告である。

反転型は一枚岩ではない。どの変数の×を最も高く評価するかで、5つに分類できる。

支配型は、相手の知性×と精神×を最も高く評価する。知的に劣り精神的に不安定な相手を選ぶ。相手を完全にコントロールすることが動機。「お前は俺がいないと何もできない」が中心的構文。

保護型は、相手の経済×を最も高く評価する。経済的に自立できない相手を選び、「守ってあげる」「養ってやる」という形で関係を構築する。暴力の自覚がないことが多い。「お前のためを思って言ってる」が中心的構文。保護型が最も厄介なのは、本人も周囲もこれを愛情だと認識していることである。

寄生型は、相手の経済○を高く評価しつつ、自分が経済×であることを前提とする。相手の経済力に寄生する。自分は何も提供

せず相手の資源を消費する。「俺は今大変な時期なんだ」「もうすぐうまくいく」が中心的構文。

外見至上型は、相手の外見だけを高く評価し、他の3変数を認知しない。外見が変化した瞬間に興味を失う。妊娠による体型変化で態度が豹変する男性はこの型である。「お前変わったな」「昔はもっと綺麗だったのに」が中心的構文。外見至上型は外見の時制処理が静的であり、これが後章で述べるMaiesiophobia（妊娠嫌悪）と直結する。

5つ目は**対等型**であり、これは反転型ではなく正常型に属する。相手の○を○として、×を×として認知し、対等な関係を構築する。比較対象として挙げる。

男性16パターン×正常型=16種、男性16パターン×反転型=16種、合計32種。女性も同様に32種。男女合わせて64種。この64種が、配偶者選好の全分類を構成する。

64種はそれぞれ固有の語彙を持つ。高く評価するときを使う言葉と、低く評価するときを使う言葉が型ごとに異なる。この語彙の違いから、個人の評価関数が正常型か反転型か、そしてどのパターンに属するかを判定できる。

表2：男性語彙対照表

	正常型高評価	正常型低評価
1	「高嶺の花」 「素敵な人」	「俺には無理だ」 「釣り合わない」
2	「いい奥さんになりそう」 「尊敬できる」	「タイプじゃない」 「友達としてなら」
3	「美人だけど地雷」 「放っておけない」	「関わったらヤバい」 「病んでる」
4	「仕事に生きてる人」 「キャリアウーマン」	「無理」 「怖い」

	正常型高評価	正常型低評価
5	「守ってあげたい」 「一緒にいたい」	「俺じゃ養えない」 「もったいない」
6	「いい人なんだけどね」 「中身はいい」	「タイプじゃない」 「友達止まり」
7	「放っておけない美人」 「危うい」	「巻き込まれたくない」 「重い」
8	「苦労してそう」 「大変そう」	「どうにもできない」 「無理」
9	「ハイスぺ美人」 「勝ち組」	「話が合わない」 「退屈」
10	「しっかりしてる」 「堅実」	「タイプじゃない」 「ときめかない」
11	「港区女子」 「派手」	「金遣い荒い」 「信用できない」
12	「金の亡者」 「何がしたいんだろう」	「無理」 「関わりたくない」
13	「清楚系」 「純粹そう」	「話が物足りない」 「浅い」
14	「地味だけどいい子」 「真面目」	「タイプじゃない」 「恋愛対象外」
15	「顔だけ」 「中身空っぽ」	「関わる意味がない」 「疲れる」
16	「頑張っしてほしい」 「大変だな」	「対象外」 「視界に入らない」

	反転型高評価	反転型低評価
1	「生意気」「可愛げがない」 「鉄の女」	「偉そう」「ムカつく」 「潰したい」
2	「怖い」「近寄りがたい」	「ブスのくせに偉そう」

	反転型高評価	反転型低評価
3	「ほっとけない」「俺がいないとダメ」	「金持ちだからって調子乗るな」
4	「めんどくさい女」	「何の価値もない」
5	「偉そう」「上から目線」	「貧乏のくせに」
6	「説教くさい」「ブス」	「黙れ」
7	「いける」「悪くない」	「まだ足りない」「もっと従え」
8	「興味ない」	「ゴミ」
9	「最高」「理想に近い」	「金あるから許す」
10	「金目当てでいける」	「ブスだけど金はある」
11	「最高」「養ってほしい」	「都合いい」
12	「金だけもらう」	「用済み」
13	「まあいける」「素直でいい」	「つまらない」
14	「興味ない」	「存在価値ない」
15	「最高！理想！」「可愛い」	「俺のもの」「逃がさない」
16	「どうでもいい」	「目障り」

表3：女性語彙対照表

	正常型高評価	正常型低評価
1	「理想の人」 「完璧」	「そんな人いない」 「高望みかな」
2	「中身で選んだ」 「安心できる」	「ときめかない」 「友達としてなら」
3	「イケメンで稼ぐけど怖い」	「DVしそう」 「地雷」

	正常型高評価	正常型低評価
4	「仕事はできるんだけど」	「人としてムリ」 「冷たい」
5	「いい人だけどお金が」 「将来が不安」	「好きだけど結婚は無理」
6	「人としては好き」 「尊敬する」	「恋愛対象じゃない」
7	「イケメンだけど不安定」	「振り回される」 「消耗する」
8	「頭はいいのにもったいない」	「将来見えない」 「無理」
9	「王子様」 「ハイスぺ」	「話が合わない」 「退屈」
10	「安定してる」 「堅実」	「ときめかない」 「おじさん」
11	「イケメン金持ちだけどヤバい」	「絶対浮気する」 「モラハラ」
12	「金だけの人」	「人間的に無理」
13	「いい人だけど将来が」	「好きだけど養えな...
14	「優しいんだけどね」	「恋愛対象外」 「お兄ちゃん」
15	「顔だけ」 「チャライ」	「遊ばれる」 「ヒモになる」
16	「ごめんなさい」	「無理」 「生理的に無理」

	反転型高評価	反転型低評価
1	「真面目すぎ」 「つまらない」	「息苦しい」 「支配的」
2	「説教くさい」 「お父さんみたい」	「キモい」 「ウザい」

	反転型高評価	反転型低評価
3	「危険な香り」 「ハマる」	「怖いけどやめられな...
4	「闇がある」 「気になる」	「めんどくさい」
5	「優しいけど物足りな...	「男らしくない」 「頼りない」
6	「いい人止まり」	「男として見れない」
7	「ダメなイケメン」 「放っておけない」	「私がいないとダメ」
8	「可哀想」「助けたい」	「でも無理」
9	「退屈」「刺激がない」	「ATMでいい」
10	「おじさん」「安牌」	「キープ」
11	「ヤバいけど好き」 「沼」	「殴られてもいい」 「離れられない」
12	「金だけある」	「ATM」
13	「物足りない」 「いい人すぎる」	「男として見れない」
14	「興味ない」	「空気」
15	「最高」「運命」 「この人しかいない」	「殴られても好き」 「依存」
16	「ダメな人ほど好き」	「私がいないとダメ」

語彙対照表の読み方を示す。男性パターン15（知性×経済×精神×外見○）の反転型が相手を高く評価するとき、「最高！理想！」
「可愛い」と言う。低く評価するとき、「俺のもの」「逃がさない」と言う。高評価の言葉が既に所有欲を含み、低評価の言葉が直接的な支配宣言になっている。正常型の同パターンは高評価時に「顔だけ」「中身空っぽ」と言う。正常型はこのパターンの相手を高く評価できない。

女性パターン15（知性×経済×精神×外見○）の反転型が相手を高く評価するとき、「最高」「運命」「この人しかいない」と言う。低く評価するとき、「殴られても好き」「依存」と言う。高評価の言葉が運命論を含み、低評価が暴力の受容を含んでいる。これはDVの被害者が加害者から離れられない認知的メカニズムを言語レベルで示している。

男性パターン1（全○）の反転型は「生意気」「可愛げがない」「鉄の女」と言う。全○の女性を前にして最も強い拒絶反応を示す。これが本論文の出発点——「賢い美人に萎える男がいる」の正体である。反転型パターン1の男性（M17）にとって、全○の女性は全変数で支配不能であり、最大の脅威となる。

語彙対照表は、日常会話のどこにでも現れる言葉から個人の評価関数を特定できることを意味する。交際初期の褒め言葉、喧嘩のときの罵倒、日常の何気ない一言。全てが評価関数の表出である。

64種の語彙対照表は、日常会話から個人の評価関数を特定するための判定ツールとして機能する。

第4章 繁殖可能性

4変数は「好み」ではない——繁殖成功率を構成する代理指標である。

配偶者選好を「好みの問題」として扱う限り、少子化もDVも個人の選択の結果にしかならない。しかし4変数を繁殖成功率の代理指標として見ると、個人の選択が種の存続とどう接続しているかが見える。

繁殖成功率は2つの段階に分かれる。出産可能性と育児可能性。出産可能性は「子が生まれるかどうか」であり、育児可能性は「生まれた子が成人まで生存するかどうか」である。この2段階でそれぞれ支配的な変数が異なる。

出産可能性を支配する変数は外見と精神である。外見は前章で述べた通り繁殖可能シグナルであり、このシグナルへの正常な反応が繁殖行動の起点になる。精神は妊娠・出産過程の心身の負荷に耐える基盤である。精神×の女性は妊娠中のストレスに対処する能力が低く、精神×の男性はパートナーの妊娠を受容できない。出産可能性は外見と精神の関数である。

育児可能性を支配する変数は知性と精神である。知性は子の発達段階に応じた適切な対応を判断する能力を意味する。子の泣き声は何を意味するか、発熱時にどう対処するか、発達の遅れに気づけるか。全て知性の認知能力に依存する。精神は育児の長期的負荷に耐える基盤である。育児は数年から十数年の連続的負荷であり、精神×の親はどこかで破綻する。育児可能性は知性と精神の関数である。

2つの関数に共通して出現する変数が精神である。出産可能性にも育児可能性にも精神が必須。精神×であれば、出産も育児もリスクが高い。精神はゲートキーパーである。精神が○でなければ、他の3変数がいくら○であっても繁殖成功率は上がらない。

経済は出産可能性にも育児可能性にも直接は寄与しない。経済○は育児の物質的条件を整えるが、経済○でも知性×精神×なら育児は破綻する。経済は補助変数であり、支配変数ではない。この区別が、現行の少子化対策がなぜ効かないかの回答になる。

表4：出産育児可能性＋適否統合表

	出産可能性	育児可能性	適否判定
1	○	○	適
2	△	○	条件付き
3	○	△	条件付き
4	△	△	条件付き
5	○	○	適

	出産可能性	育児可能性	適否判定
6	△	○	条件付き
7	△	×	不適
8	×	△	不適
9	○	△	条件付き
10	△	△	条件付き
11	△	×	不適
12	×	×	不適
13	△	△	条件付き
14	×	△	不適
15	△	×	不適
16	×	×	不適

16パターンに対して出産可能性と育児可能性を判定し、適/不適/条件付きに分類する。適と判定されるのはパターン1（全○）とパターン5（知性○経済×精神○外見○）の2つのみ。条件付きが7つ。不適が7つ。不適7つのうち6つに精神×が含まれる。精神がゲートキーパーであることが数字で確認できる。

次に男女の繁殖可能条件の非対称性を示す。

表5：男女繁殖可能条件比較表

	知性	経済	精神	外見	必要変数数
女性の必要条件	○	不問	○	○	3
男性の必要条件	○	○※	○	○	4

※パートナーが経済的に自立している場合は補填可能

女性の繁殖可能条件は知性○・精神○・外見○の3変数。経済は不問。経済×でも、知性と精神と外見が○であれば出産し育児する

能力がある。経済的支援は外部から得られる。

男性の繁殖可能条件は知性○・経済○・精神○・外見○の4変数全○。男性には出産能力がないため、繁殖への寄与はパートナーの出産・育児を支える形でしか実現しない。パートナーを経済的に支える能力（経済○）、パートナーの知的判断を理解し協力する能力（知性○）、パートナーの精神的負荷を分担する能力（精神○）、そしてパートナーの妊娠による外見変化を受容する能力（外見の動的認知）。4変数全てが必要になる。

この非対称性は重大な帰結を持つ。女性が経済○を自力で持てば、男性の経済○は不要になる。男性の繁殖可能条件が4変数全○であるということは、女性が自力で経済○を持った時点で、男性の提供できる固有の価値は知性○・精神○・外見動的認知の3つに限られる。この3つのうち1つでも×であれば、その男性は繁殖において不要な個体となる。精子バンクで代替可能になる。

表6：64種繁殖可能性チェック表

男性32種

	知性	経済	精神	外見	繁殖可能性
M1 正常	○	○	○	○	✓
M2 正常	○	○	○	×	
M3 正常	○	○	×	○	
M4 正常	○	○	×	×	
M5 正常	○	×	○	○	✓

	知性	経済	精神	外見	繁殖可能性
M6 正常	○	×	○	×	
M7 正常	○	×	×	○	
M8 正常	○	×	×	×	
M9 正常	×	○	○	○	
M10 正常	×	○	○	×	
M11 正常	×	○	×	○	
M12 正常	×	○	×	×	
M13 正常	×	×	○	○	
M14 正常	×	×	○	×	
M15 正常	×	×	×	○	
M16 正常	×	×	×	×	
M17 正常	○	○	○	○	
M18 正常	○	○	○	×	
M19 正常	○	○	×	○	

	知性	経済	精神	外見	繁殖可能性
M20 正常	○	○	×	×	
M21 正常	○	×	○	○	
M22 正常	○	×	○	×	
M23 正常	○	×	×	○	
M24 正常	○	×	×	×	
M25 正常	×	○	○	○	
M26 正常	×	○	○	×	
M27 正常	×	○	×	○	
M28 正常	×	○	×	×	
M29 正常	×	×	○	○	
M30 正常	×	×	○	×	
M31 正常	×	×	×	○	
M32 正常	×	×	×	×	

女性32種

	知性	経済	精神	外見	繁殖可能性
F1 正常	○	○	○	○	✓
F2 正常	○	○	○	×	
F3 正常	○	○	×	○	
F4 正常	○	○	×	×	
F5 正常	○	×	○	○	✓
F6 正常	○	×	○	×	
F7 正常	○	×	×	○	
F8 正常	○	×	×	×	
F9 正常	×	○	○	○	
F10 正常	×	○	○	×	
F11 正常	×	○	×	○	
F12 正常	×	○	×	×	
F13 正常	×	×	○	○	
F14 正常	×	×	○	×	

	知性	経済	精神	外見	繁殖可能性
F15 正常	×	×	×	○	
F16 正常	×	×	×	×	
F17 正常	○	○	○	○	
F18 正常	○	○	○	×	
F19 正常	○	○	×	○	
F20 正常	○	○	×	×	
F21 正常	○	×	○	○	
F22 正常	○	×	○	×	
F23 正常	○	×	×	○	
F24 正常	○	×	×	×	
F25 正常	×	○	○	○	
F26 正常	×	○	○	×	
F27 正常	×	○	×	○	
F28 正常	×	○	×	×	

	知性	経済	精神	外見	繁殖可能性
F29 正常	×	×	○	○	
F30 正常	×	×	○	×	
F31 正常	×	×	×	○	
F32 正常	×	×	×	×	

表6は繁殖に適したペアを示している。しかし「適している」と「実行する」は別である。繁殖可能性が×であっても、身体的相性によって繁殖は物理的に実行される。

4変数の認知が全て機能していないペアほど、身体的快樂への依存度が高くなる。関係を維持する認知的要素がないから、身体が唯一の接着剤になる。認知欠損の変数が多いほどこの依存度は上がり、4変数全×のM31×F31で最大になる。

M31×F31——DVリスク第1位のペアリング——の社会的通称は「体の相性がいいカップル」である。「体の相性がいいから別れられない」という語りは、4変数の認知欠損を身体的快樂で補填している状態の自己報告にほかならない。

この原理はM31×F31に限定されない。繁殖不適合の61種すべてに、程度を変えて同じバイパスが作用する。2変数×のペアにも3変数×のペアにも、認知的接着剤が不足している分だけ身体への依存が発生する。「体の相性がいい」の語りの頻度と強度は、そのペアの認知欠損の重症度を示すスケールとして機能する。

身体のセンサー自体は正確である。生物として繁殖相手を選ぶ判断軸としては機能している。問題はそれしか動いていないことにある。「体の相性がいいから付き合う」「体の相性がいいから

別れられない」になった瞬間、残り3変数——知性・経済・精神——の判断が動いていないことの自己申告になる。体の相性が「強い」のではない。他の3つが死んでいるから、相対的に体だけが残る。

体の相性の優先は、正常型を認知上の反転型に変換する。

M1×F1は4変数全○同士であり、理論上最も繁殖に適したペアリングである。しかしこのペアが体の相性を最優先にした瞬間、4変数の認知判断が停止し、認知上M32×F32——4変数全×同士——と区別がつかなくなる。最良のペアが最悪のペアに変わる。しかも本人は転落に気づかない。身体のセンサーが「良い」と言い続けているから。

「体の相性がいい」は最後に残るセンサーであり、最初に使うセンサーではない。

64種全てに繁殖可能性の判定を行う。繁殖可能性が高い（✓）と判定されるのはM1（男性正常型・全○）、M5（男性正常型・知性○経済×精神○外見○）、F1（女性正常型・全○）の3種のみ。64種中3種。4.7%。

M5が✓になるのは、経済×であっても知性○精神○外見○であれば、女性の繁殖条件（知性○精神○外見○）を認知できるため。経済は男性側の繁殖可能条件ではあるが、パートナーが経済的に自立している場合は補填可能。

反転型は全滅。反転型は相手の×を高く評価するため、繁殖可能条件を満たすパートナーを選ばない。全○の相手を避け、×のある相手に惹かれる。繁殖可能条件は○の集積によって成立するから、×を求める反転型は構造的に繁殖不適合なパートナーを選択し続ける。

繁殖可能なペアリングは2通りしかない。M1×F1、またはM5×F1。繁殖に至るには男性が正常型でパターン1か5であり、

女性が正常型でパターン1である必要がある。

64種中4種という数字は、繁殖という生物学的課題がいかに狭い認知条件の上に成立しているかを示している。

第5章 時制処理:全ての根

反転型の認知欠損は表層の症状であり、根にあるのは時制処理の欠如である。

第3章で反転型は相手の○を脅威と感じ×を歓迎すると述べた。なぜそうなるのか。なぜ○を○として処理できないのか。個別の変数の認知欠損を並べるだけでは説明にならない。4変数の認知欠損を同時に引き起こす単一の根が存在する。それが時制処理である。

時制処理とは、過去・現在・未来を統合して認知する能力を指す。「自分が過去にこうしたから、現在こうなっていて、だから未来にこうする」という三点統合が可能な認知様式を動的認知と呼ぶ。三点統合ができず、現在の状態だけで判断する認知様式を静的認知と呼ぶ。

この三点統合を「実行構文」と定義する。実行構文とは「主語が過去の行為を認知し、現在の状態をその結果として認知し、未来の行為をその帰結として選択する」構文である。「俺がこうした、だから今こうなっている、だからこうする」。この構文が組めることが、責任の認知であり、判断の基盤であり、行動の選択である。実行構文が組めなければ、決定という行為が成立しない。残るのは衝動か回避だけになる。

表7：時制処理対応表

	正常/反転	知性	経済	精神	外見
M1	正常	○	○	○	○
M2	正常	○	○	○	×

	正常/反転	知性	経済	精神	外見
M3	正常	○	○	×	○
M4	正常	○	○	×	×
M5	正常	○	×	○	○
M6	正常	○	×	○	×
M7	正常	○	×	×	○
M8	正常	○	×	×	×
M9	正常	×	○	○	○
M10	正常	×	○	○	×
M11	正常	×	○	×	○
M12	正常	×	○	×	×
M13	正常	×	×	○	○
M14	正常	×	×	○	×
M15	正常	×	×	×	○
M16	正常	×	×	×	×
M17	反転	○	○	○	○
M18	反転	○	○	○	×
M19	反転	○	○	×	○
M20	反転	○	○	×	×
M21	反転	○	×	○	○
M22	反転	○	×	○	×
M23	反転	○	×	×	○
M24	反転	○	×	×	×
M25	反転	×	○	○	○
M26	反転	×	○	○	×
M27	反転	×	○	×	○
M28	反転	×	○	×	×

	正常/反転	知性	経済	精神	外見
M29	反転	×	×	○	○
M30	反転	×	×	○	×
M31	反転	×	×	×	○
M32	反転	×	×	×	×

	時制処理	繁殖可能性
M1	○	✓
M2	不問	
M3	△	
M4	不問	
M5	○	✓
M6	不問	
M7	△	
M8	不問	
M9	△	
M10	不問	
M11	×	
M12	不問	
M13	△	
M14	不問	
M15	×	
M16	不問	
M17	×	
M18	不問	
M19	×	
M20	不問	

	時制処理	繁殖可能性
M21	×	
M22	不問	
M23	×	
M24	不問	
M25	×	
M26	不問	
M27	×	
M28	不問	
M29	×	
M30	不問	
M31	×	
M32	不問	

外見の時制処理がこれを最も明確に示す。第2章で述べた通り、外見○は「妊娠していない女性」の繁殖可能シグナルである。妊娠すると外見が変化する。このとき時制処理ができる男性は「妊娠前の外見→妊娠中の外見変化→出産後の回復」という時間軸の中で外見の変動を処理する。一時的な変動であり、同一人物であり、変動の原因は自分の行為（性交渉による妊娠）であると認知できる。

時制処理ができない男性は、妊娠による外見変化を「外見○から外見×への不可逆な変化」として処理する。現在の外見だけが認知対象であり、過去の外見との連続性がなく、未来の回復も見えない。さらに重大なのは、外見変化の原因が自分の行為であるという因果が認知できないことである。「妊娠させたのは自分だ」という過去と「外見が変わった」という現在が接続しない。結果として「お前が変わった」「お前が太った」という構文になる。原因の主語が自分から相手にすり替わる。

この外見の時制処理の可否と繁殖可能性は完全に一致する。表7（時制処理対応表）で時制処理○と判定されるのはM1とM5のみ。表6で繁殖可能性✓と判定されるのもM1とM5のみ。同じ2種。繁殖可能な男性とは、時制処理ができる男性のことである。

ここからMaiesiophobiaを定義する。Maiesiophobiaとは「妊娠嫌悪」であり、パートナーの妊娠に対して恐怖・嫌悪・逃避・攻撃を示す反応を指す。Maiesiophobiaの認知的正体は外見の静的認知である。妊娠による繁殖可能シグナルの消失を「対象の価値喪失」として処理し、シグナルの消失原因が自分の行為であるという因果を認知できない。Maiesiophobiaは外見至上型の反転型に最も顕著に発現するが、外見の時制処理が静的であれば他のパターンでも発現しうる。

時制処理の欠如は外見だけでなく4変数全てに波及する。知性の時制処理ができなければ、相手の知的成長を「生意気になった」と処理する。経済の時制処理ができなければ、相手の昇進を「俺より偉くなりやがって」と処理する。精神の時制処理ができなければ、相手の回復を「勝手になった」と処理する。全て同じ構造である。過去から現在への変化を「変化」として認知できず、現在の状態だけを静的に処理する。

ここで因果の全体像を一本で示す。

時制処理の欠如

- 静的認知
- 4変数の認知欠損（認知できるものが減る）
- 評価関数の反転（認知できないものを歓迎する）
- 反転型の配偶者選好（×のある相手を選ぶ）
- 繁殖不適合なペアリング（○が揃わない組み合わせ）
- DV（相手の○を破壊する行動）
- 子への波及（子の認知発達が阻害される）
- 世代間転写（子が時制処理を獲得できない）
- 次世代の時制処理の欠如

サイクルが閉じている。始点と終点が同じである。時制処理の欠如が時制処理の欠如を再生産する。

このサイクルの中で最も重要な接続点は「DV→子への波及→世代間転写」である。DVは加害者と被害者の二者間の問題で完結しない。DV環境下で育つ子は、親の壊れた構文を言語環境として受け取る。「お前が怒らせた」「お前のせいだ」「いつの話してんだよ」。これらの構文を日常的に聞いて育つ子は、正常な時制処理を獲得する機会を奪われる。因果の方向が反転した構文、主語が消失した構文、過去が無効化された構文。これが子の言語環境の標準になる。子は壊れた構文を「普通の日本語」として学習し、壊れた時制処理を「普通の認知」として内面化する。

時制処理の欠如が時制処理の欠如を再生産する——このサイクルが、本理論が扱う全現象の共通基盤である。

第6章 暴力とは何か:論理の破壊とDVの分類

暴力とは身体を傷つけることではなく、論理を破壊することである。

「なぜこうなった」「相手はなぜそう思うのか」「自分はなぜそうしたいのか」。この「なぜ」が問えれば因果が見える。因果が見えれば過去から現在を通して未来に到達する。到達すれば選択肢が見える。選択肢が見えれば行動を選べる。これが言葉の機能であり、論理の機能である。

「なぜ」が問えないと因果が止まる。止まれば現在に閉じ込められる。閉じ込められれば目の前の不快を消すことしかできない。不快を消す最短距離が破壊である。物理的に殴るか、言葉で人格を否定するか、無視して存在を消すか。全て、停滞を破壊によって解消しようとする行為である。暴力とは論理の破壊であり、論理の破壊とは相手が持つ構文を壊すことである。

DVの全手段がここから説明できる。身体的暴力は相手の身体の論理を壊す。身体は「傷つけなければ機能し続ける」という論理の上に成立しているが、殴ることでその論理を破壊する。精神的暴力は相手の思考の論理を壊す。「お前が悪い」「お前のせいだ」「覚えてない」は相手の因果構文を攻撃し、相手が持つ「あなたが殴った→私が傷ついた→だからやめてほしい」という正常な構文を破壊する。経済的暴力は相手の自立の論理を壊す。「誰の金で生活してると思ってる」は相手の経済的主体性を否定する。性的暴力は相手の意思の論理を壊す。相手の同意という論理的前提を無視する。ネグレクトは相手の存在の論理を壊す。応答しないことで、相手が存在するという前提自体を否定する。

最も破壊的なのは、相手の時制処理を壊すことである。「お前が怒らせた」は相手の因果を逆転させる。「いつの話してんだよ」は相手の過去を無効化する。「殴ってない」は相手の記憶を否定する。これらは全て、相手の頭の中にある時制処理を攻撃している。相手も現在に閉じ込める。被害者が「自分が悪いのかもしれない」と思い始めるのは、被害者の時制処理が破壊された証拠である。

DVは突然始まらない。段階を踏む。

表8：DV発達6段階表

段階	行動	認知的意味
1. テスト	小さな否定、冗談に見せた侮辱	相手がどこまで受け入れるか測定
2. 孤立化	友人・家族との接触を減らす	比較対象と逃げ道を遮断
3. 経済支配	金の管理、就労制限	物理的な離脱不能化
4. 精神破壊	人格否定の反復、ガスライティング	被害者の自己認知を破壊

段階	行動	認知的意味
5. 身体暴力	殴る蹴る	精神破壊後なので被害者が抵抗できない
6. 子への波及	子への暴力・ネグレクト	配偶者が機能停止し次の標的へ

第1段階はテスト。小さな否定、冗談に見せた侮辱で、相手がどこまで受け入れるかを測定する。第2段階は孤立化。友人・家族との接触を減らし、比較対象と逃げ道を遮断する。第3段階は経済支配。金の管理、就労制限により物理的な離脱不能状態を作る。第4段階は精神破壊。人格否定の反復、ガスライティングにより被害者の自己認知を破壊する。第5段階は身体暴力。精神破壊後であるため被害者は抵抗できない。第6段階は子への波及。配偶者が機能停止し、次の標的として子に向かう。

この6段階は支配構文の50段階モデル（Viorazu., 2026, DOI: 10.5281/zenodo.18134785）の行動レベルでの圧縮版にあたる。50段階モデルは構文の微細な進行を記述し、6段階モデルは行動の大きな流れを記述する。

表9 対応する支配50段階

DV6段階	対応する支配50段階（Viorazu., 2026）
1. テスト	段階1～5 （関係性宣言、恩着せ、感謝強要、比較優位、感情操作）
2. 孤立化	段階17, 28, 31 （孤立化、排他的理解、排他的信頼）
3. 経済支配	段階2, 7, 9, 13 （恩着せ、依存強制、恩恵強調、依存誘導）
4. 精神破壊	段階6, 10～12, 21～27 （能力否定、非難、性格規定、差別指紋、直接命令～無力化）

DV6段階	対応する支配50段階（Viorazu., 2026）
5. 身体暴力	段階20, 25, 45, 46 （暴力脅迫、暴力正当化、懲罰宣言、調教宣言）
6. 子への波及	段階47～50 （創造主、屈辱享樂、再生産幻想、存在定義）

次にDVの分類体系を示す。DVは4つの軸で分類できる。

第1軸は加害対象。配偶者に向かうか、子に向かうか、両方に向かうか。第2軸は加害手段。身体的、精神的、経済的、性的、ネグレクトの5種。第3軸は発動タイミング。交際時、結婚後、妊娠判明時、出産後、連れ子との同居開始時。第4軸は認知パターン。加害者の4変数のどの認知欠損がDVを駆動しているか。

4変数の認知欠損がどのDV手段に対応するかを示す。

表10：認知欠損×DV手段対応表

認知欠損	主なDV手段	発動タイミング	主な加害対象
知性認知×	精神的暴力（意見を潰す、馬鹿にする、発言権剥奪）	交際時から。相手が意見を言うたびに発動	配偶者中心。子が知性を見せ始めると子にも移行
経済認知×	経済的暴力（金の管理、就労制限/搾取）	結婚後・同居後。経済的に逃げられない状態を作ってから	配偶者中心
精神認知×	身体的暴力+精神的暴力（感情制御不能、追い詰め）	交際時から。ストレスがかかるたびに発動	配偶者にも子にも。対象を選ばない
外見認知×（静	ネグレクト+性的暴力（興味喪	妊娠判明時・出産後	配偶者→ネグレクト。子→

認知欠損	主なDV手段	発動タイミング	主な加害対象
的)	失/拒絶)		存在自体の拒絶

知性認知×は精神的暴力に対応する。相手の意見を潰す、馬鹿にする、発言権を剥奪する。相手の知性を認知できないから、相手の発言が全て「生意気」として処理され攻撃対象になる。交際時から相手が意見を言うたびに発動し、子が知性を見せ始めると子にも移行する。

経済認知×は経済的暴力に対応する。金の管理、就労制限または搾取。結婚後・同居後に、相手が経済的に逃げられない状態を作ってから発動する。

精神認知×は身体的暴力と精神的暴力の両方に対応する。感情制御不能と追い詰め。交際時からストレスがかかるたびに発動し、配偶者にも子にも向かう。対象を選ばない。

外見認知×（静的）はネグレクトと性的暴力に対応する。妊娠判明時と出産後に興味喪失と拒絶として発動する。配偶者に対してはネグレクト、子に対しては存在自体の拒絶。

表11：男性64種DV対応表

	正常/反転	DV種類	初期サイン（言葉）
M1	正常	リスク極低	なし
M2	正常	リスク極低	なし
M3	正常	精神的暴力	「お前が不安定だから俺も疲れる」
M4	正常	精神的暴力＋経済的支配	「俺がいなかったらどうするんだ」

	正常/反転	DV種類	初期サイン（言葉）
M5	正常	リスク極低	なし
M6	正常	リスク極低	なし
M7	正常	精神的暴力	「俺だって大変なのに」
M8	正常	ネグレクト	「もう知らない」 「勝手にしろ」
M9	正常	リスク低	なし
M10	正常	リスク低	なし
M11	正常	経済的支配＋身体的暴力	「誰の金で生活してると 思ってる」
M12	正常	経済的支配＋ネグレクト	「金は出すから黙って ろ」
M13	正常	リスク低	なし
M14	正常	リスク低	なし
M15	正常	身体的暴力＋ネグレクト	「うるさい」「黙れ」
M16	正常	ネグレクト	無言
M17	反転	精神的暴力（高度）	「君のためを思って言っ てる」 「俺がいないとダメでしょ」
M18	反転	精神的暴力＋経済的支配	「感謝が足りない」 「誰のおかげだと思ってる」
M19	反転	精神的＋身体的＋経済的支配	「お前は俺がいないとダメだ」 「逃げられると思うな」
M20	反転	精神的暴力＋経済的支配	「お前に何ができる」 「外では通用しない」

	正常/反転	DV種類	初期サイン（言葉）
M21	反転	精神的暴力	「俺の方が正しい」 「お前はわかってない」
M22	反転	精神的暴力	「だから言っただろ」 「俺の言う通りにしろ」
M23	反転	精神的＋身体的＋性的暴力	「可愛いから許す」 「言うこと聞けよ」
M24	反転	精神的暴力＋ネグレクト	「お前なんか誰も相手にしない」
M25	反転	経済的支配	「俺の金で好きにさせてやってるだろ」
M26	反転	経済的支配＋ネグレクト	「金で解決しろ」 「面倒くさい」
M27	反転	経済的支配＋身体的＋性的暴力	「俺の女だろ」 「逆らうな」
M28	反転	経済的支配＋ネグレクト	「金だけ出すから関わるな」
M29	反転	精神的暴力（軽度）	「お前は俺がいないと寂しいだろ」
M30	反転	ネグレクト	「興味ない」
M31	反転	全手段複合	「お前は俺のもの」 「殺すぞ」 「どこにも行くな」
M32	反転	ネグレクト＋精神的暴力	「消えろ」 「目障り」

表11：女性64種DV対応表

	正常/反 転	DV種類	初期サイン（言葉）
F1	正常	リスク極低	なし
F2	正常	リスク極低	なし
F3	正常	精神的暴力（子...	「あんたのせいでこう なった」
F4	正常	精神的暴力＋ネグ レクト	「私は仕事があるか ら」 「自分でやって」
F5	正常	リスク極低	なし
F6	正常	リスク極低	なし
F7	正常	精神的暴力	「なんでわかってくれ ないの」
F8	正常	ネグレクト	「もう無理」 「助けて」
F9	正常	リスク低	なし
F10	正常	リスク低	なし
F11	正常	精神的暴力＋経済 的支配	「稼いでるのは私」 「あんたは何もしてな い」
F12	正常	経済的支配＋ネグ レクト	「金は渡さない」
F13	正常	リスク低	なし
F14	正常	リスク低	なし
F15	正常	身体的暴力（子へ） ＋ネグレクト	「うるさい」 「あんたなんか産むん じゃなかった」
F16	正常	ネグレクト（全...	無反応
F17	反転	精神的暴力（高...	「あなたのためを思っ て」

	正常/反転	DV種類	初期サイン（言葉）
			「私がいないとダメでしょ」
F18	反転	精神的暴力＋経済的支配	「私が正しいのわかるでしょ」
F19	反転	精神的＋身体的暴力	「あんたが怒らせるから」 「私を見捨てるの」
F20	反転	精神的暴力＋経済的支配	「私がどれだけ犠牲にしてると思ってる」
F21	反転	精神的暴力	「男のくせに」 「情けない」
F22	反転	精神的暴力	「だから言ったのに」 「なんで聞かないの」
F23	反転	精神的＋身体的暴力	「私を置いていくの」 「死んでやる」
F24	反転	精神的暴力＋ネグレクト	「誰も私をわかってくれない」
F25	反転	経済的支配＋精神的暴力	「誰が食わせてると思ってる」
F26	反転	経済的支配＋ネグレクト	「金は出すから口出さな」
F27	反転	身体的＋精神的＋経済的暴力	「あんたのせいで狂った」 「離れたら殺す」
F28	反転	経済的支配＋ネグレクト	「金だけの関係」
F29	反転	精神的暴力（軽...	「もっと男らしくし...
F30	反転	ネグレクト	無関心
F31	反転	全手段複合	「この子さえいなければ」

	正常/反転	DV種類	初期サイン（言葉）
			「あんたに似てブサイク」
F32	反転	ネグレクト＋精神的暴力	「産まなきゃよかった」 「消えたい」

64種全てに対してDV種類と初期サインの言葉を対応させた。初期サインは交際初期に出現する言葉であり、この段階で評価関数を判定できれば、DVの発生を事前に予測できることを意味する。

M17（反転型・全○）の初期サインは「君のためを思って言ってる」「俺がいないとダメでしょ」。最も巧妙な精神的暴力。全○であるため社会的信用が高く、周囲が加害者と認識しない。M31（反転型・知性×経済×精神×外見○）の初期サインは「お前は俺のもの」「殺すぞ」「どこにも行くな」。全手段複合。隠蔽能力がないため暴力が直接的だが、被害者が反転型F31であれば「愛されてる」と解釈し逃げない。

女性側も同様に、F17は「あなたのためを思って」で子や配偶者を支配し、F31は「この子さえいなければ」で子を標的にする。

DVが実行されるかどうかの閾値は精神と知性の2変数の組み合わせで決まる。

表12 DVボーダー（実行の分岐）

精神	知性	物理的DV	精神的DV	ボーダーの位置
○	○	実行しない	実行する	物理と精神の間
○	×	実行しにくい	無自覚に実行	物理の手前。精神的DVに自覚なし

精神	知性	物理的DV	精神的DV	ボーダーの位置
×	○	計画的に 実行	高度に実 行	状況依存。密室で超え る
×	×	即座に実 行	即座に実 行	ボーダーなし

精神○知性○はDVの物理的実行をしない。ただし精神的暴力は実行する。ボーダーは物理と精神の間にある。精神○知性×は物理的DVを実行しにくいだが、精神的DVは無自覚に実行する。精神×知性○は計画的に物理的DVを実行する。密室で、証拠を残さず。最も発見されにくい。精神×知性×はボーダーなし。即座に全手段を実行する。

DVの可視性は経済と外見の2変数で決まる。経済○外見○は最も見えにくい。社会的信用が隠蔽装置として機能する。経済×外見×は最も見えやすい。隠す手段がない。DV被害が発見されやすいのは経済的に困窮した世帯であるという社会的観察と一致する。しかしこれは発見バイアスであり、経済○外見○の世帯ではDVが存在しないのではなく発見されないだけである。

反転型5分類とDV手段の対応を示す。

表13：反転型5分類×DV手段対応表

反転型	主なDV手段	特徴
支配型	全手段を複合使用	相手を完全にコントロール。手段を選ばない。最も危険
保護型	経済的暴力＋精神的暴力	「お前のためだ」と言いながら自立を奪う。暴力の自覚がない
寄生型	経済的暴力（逆方向）＋ネグレクト	相手から搾取し育児参加しない。いないほうがマシな存在
外見至上型	ネグレクト＋性的暴力	外見が変わると興味を失う。妊娠逃げ、産後ネグレクトの主因

支配型は全手段を複合使用する。保護型は経済的暴力と精神的暴力を使い「お前のためだ」と言いながら自立を奪う。暴力の自覚がないことが保護型の最大の危険性である。寄生型は経済的暴力を逆方向に使う。相手から搾取し育児参加しない。いないほうがマシな存在。外見至上型はネグレクトと性的暴力を使い、外見が変わると興味を失う。妊娠逃げ、産後ネグレクトの主因。

妊娠逃げる認知パターンを説明する。妊娠逃げとは、パートナーの妊娠判明時に男性が関係を断つ行動を指す。これは外見の静的認知と精神×の複合で発生する。外見の静的認知によって妊娠＝繁殖シグナルの消失と処理され、精神×によって不安への対処ができず逃避が選択される。さらに時制処理欠如により「性交渉→妊娠」の因果が認知できないため、妊娠が「自分の行為の結果」として処理されない。「お前が勝手に妊娠した」という構文は、因果の主語消失と時制処理欠如の直接的な表出である。

連れ子への暴力の認知パターンを説明する。連れ子とは血縁のない子であり、反転型にとって繁殖価値がゼロの存在として認知される。知性×精神×の男性が連れ子のいる女性と交際した場合、子を「邪魔な存在」として処理する。子の知性の発達（言葉が増える、意見を言い始める）が加害者の知性×を脅かし、攻撃が激化する。連れ子虐待の加害者に知性×精神×が多いことはこの理論から予測される。

DVリスクが高いペアリングの上位20組を示す。

表14：DVリスクTOP20表

順位	組み合わせ	加害者	被害者	DVリスク要因
1	M31×F31	相互	相互	双方全×求め。相互暴力・共依存。逃げる判断力が双方にない

順位	組み合わせ	加害者	被害者	DVリスク要因
2	M31×F14	M31	F14	精神○だけの女性を全×に破壊。善良さが逃げ遅れの原因
3	M31×F6	M31	F6	知性○精神○が「助けたい」で巻き込まれる。外見×で自己評価低く逃げにくい
4	M27×F31	相互	相互	金と外見で支配、女性は全×に依存。経済的DVと身体的DVが同時進行
5	M31×F13	M31	F13	精神○外見○が外見で捕まり精神を破壊される。経済×で逃げる資金なし
6	M23×F31	M23	F31	知性○で巧妙に操作。女性は暴力を愛と解釈
7	M19×F27	相互	相互	知性○経済○で逃げられない環境構築。精神×同士で激化する一方
8	M31×F2	M31	F2	全○女性が「変われる」と信じて留まる。全能力を注いで消耗
9	M27×F27	相互	相互	金と外見あり精神×同士。派手な生活の裏で暴力が隠蔽
10	M23×F23	相互	相互	知性○で互いの弱点を正確に攻撃。外見○で世間体良く介入されにくい
11	M19×F31	M19	F31	知性○経済○で社会的信用あり。DVしても信じてもらえない
12	M31×F16	M31	F16	全×の女性に全×の男性。助けを求める能力も手段もな

順位	組み合わせ	加害者	被害者	DVリスク要因
				い。最も発見されにくい
13	M15×F31	M15	F31	外見だけの男性に全×を求める女性。知性×精神×で暴力の加減がない
14	M23×F14	M23	F14	知性○で心理操作。精神○だけの地味な女性が「自分が悪い」と思い込む
15	M11×F31	M11	F31	経済○精神×外見○。金と外見で支配し知性×で加減できない
16	M19×F23	相互	相互	互いの知性で精神攻撃。外見と経済で世間体維持
17	M31×F10	M31	F10	堅実な女性が「支えたい」で入る。経済力が支え続ける資金源に
18	M7×F31	M7	F31	知性○外見○で操作・誘引。経済×で女性に寄生しながら暴力
19	M27×F23	相互	相互	精神×同士。経済力で力関係偏り男性側が加害主導
20	M31×F5	M31	F5	全○に近いが経済×。逃げる資金なく全能力を破壊される

第1位はM31×F31。双方が知性×経済×精神×外見○の反転型。相互暴力、共依存、子への虐待、世代間転写の全てが同時に発生し、どちらにも逃げる判断力がない。M31は全20組中8回出現し、F31は11回出現する。M31が主要な加害者供給源であり、F31が主要な被害者吸引源であると同時に相互加害の当事者でもある。

正常型の女性もDVに巻き込まれる。TOP20にはF2（全○正常型）、F5（知性○精神○外見○正常型）、F6（知性○精神○正常型）、F10（経済○精神○正常型）、F13（精神○外見○正常型）、F14（精神○正常型）が含まれる。これらの女性はいずれも精神○を持っており、「支えたい」「変われるはず」「助けたい」という正常型の認知が逃げ遅れの原因になる。正常型の精神○が反転型加害者にとっては搾取可能な資源として機能してしまう逆説がここにある。

DVの種類・手段・対象・タイミングの全てが、加害者の認知パターンから予測可能である。

第7章 ダークトライアドとの対応

反転型の認知構造は、ダークトライアド（ナルシシズム・マキャベリズム・サイコパシー）の発現パターンと対応する。

ダークトライアドは心理学において独立した人格特性として扱われてきた。ナルシシズム（N）は誇大な自己像と賞賛への渴望、マキャベリズム（Mach）は他者操作と冷笑的世界観、サイコパシー（P）は共感欠如と衝動性として定義される。従来の研究はこの3特性をそれぞれ独立に測定し、相関を分析してきた。本理論はこれらを独立した人格特性としてではなく、認知4軸の欠損パターンから派生する二次的現象として位置づける。

表15：男性64種DT対応表

	N	Mach	P	補足
M1 正常	×	×	×	闇特性なし
M2 正常	×	×	×	闇特性なし
M3 正常	△	×	×	精神×で 軽度N

	N	Mach	P	補足
M4 正常	△	△	×	他者を道具視しやすい
M5 正常	×	×	×	闇特性なし
M6 正常	×	×	×	闇特性なし
M7 正常	△	×	△	衝動制御弱。 表面化しにくい
M8 正常	×	×	△	共感枯渇からP傾向
M9 正常	△	×	×	自己評価が実力より高い
M10 正常	×	×	×	闇特性低い
M11 正常	○	△	△	典型的N。 知性×で自覚なし
M12 正常	△	△	×	金だけが武器。 Mach傾向
M13 正常	△	×	×	外見自信から軽度N
M14 正常	×	×	×	闇特性低い
M15 正常	○	×	△	外見だけの自信。N+P
M16 正常	×	×	△	P傾向は環境次第
M17 反転	○	○	×	最巧妙N+Mach。 善人のふりをした支配者
M18 反転	○	○	×	M17同質。 より陰湿

	N	Mach	P	補足
M19 反転	○	○	○	闇フルセット。 最も危険な類型の一つ
M20 反転	△	○	△	経済と知性で操作特化
M21 反転	○	△	×	知的優位性を確信するN
M22 反転	△	△	×	知的マウントMach
M23 反転	○	△	○	N+P。 ホストやヒモに多い
M24 反転	×	△	△	知性で言い訳構築するMach
M25 反転	○	△	×	金と外見で全能感。 N中心
M26 反転	△	○	×	金で人間関係管理するMach
M27 反転	○	○	○	闇フルセット。 M19より粗暴
M28 反転	×	○	△	金で他者を 買えると思ってる
M29 反転	○	×	×	外見自信のN。 暴力には至りにくい
M30 反転	×	×	×	闇特性低い。 実害少ない
M31 反転	○	×	○	N+P。操作できず暴力直行。 最も粗暴
M32 反転	×	×	○	反社会的P。 破壊だけが残る

64種全てにN・Mach・Pの発現を対応させた。ここから浮かび上がるのは明確な法則性である。

知性○の闇はMachが中心になる。知性○は操作能力を意味する。相手の心理を読み、言葉で動かし、状況を自分に有利に構成できる。知性○かつ反転型であれば、この操作能力が支配に向かう。M17（反転型・全○）とF17が典型であり、全変数を認知できる能力を持ちながら反転型であるため、社会的に完璧な善人として振る舞いながら対象を精緻に支配する。「君のためを思って」が本気に聞こえるのは、この型が全○の認知能力を持っているからである。善人のふりをした支配者。N+Machの最も巧妙な発現形態。

知性×の闇はPが中心になる。知性×は操作能力の欠如を意味する。操作できないから物理的破壊に向かう。M31（反転型・知性×経済×精神×外見○）が典型であり、外見だけを武器に対象を引きつけ、操作できないから直接暴力に移行する。N+Pの最も粗暴な発現形態。M31がDVリスクTOP20に8回出現する理由がここにある。操作で支配を維持できないから暴力が恒常化する。

Nは外見○と精神×の組み合わせで最も強く発現する。外見○は他者からの賞賛を得やすい条件であり、精神×は賞賛への渴望を制御できない条件。この組み合わせでNが発現するのは必然である。M11（正常型・知性×経済○精神×外見○）は典型的なNであり、知性×のため自覚がない。経済○と外見○が社会的成功の外見を作り、精神×がその裏で賞賛への飢餓を駆動する。

闇3要素フルセット（N+Mach+P全て○）が発現するのは4類型に限られる。M19、M27、F19、F27。全て精神×外見○を含む。精神×が3要素全て的前提条件であり、外見○が対象を引きつける条件。この4類型の中で知性の有無がMachとPの比率を決める。M19（知性○経済○精神×外見○）は知性でMachが強化されるため計画的で隠蔽能力が高い。M27（知性×経済○精神×外見○）は知性×でMachが弱くPが前面に出るため粗暴で発見されやすい。

精神○の反転型は闇特性が軽度に留まる場合がある。M21（反転型・知性○精神○外見○）はNを発現するが、精神○が衝動を制御するため物理的暴力には至りにくい。精神はダークトライアドのゲートキーパーでもある。第4章で繁殖可能性のゲートキーパーが精神であると述べたが、ダークトライアドの深刻度のゲートキーパーもまた精神である。精神○は繁殖を可能にし暴力を抑制する。精神×は繁殖を不可能にし暴力を解放する。

男女間の鏡像関係が存在する。M11とF11、M27とF27、M31とF31はそれぞれ同じ4変数の組み合わせを持ち、同じ闇特性を発現する。M17とF17は同じ全○反転型であり、同じN+Machの巧妙な支配を行う。ダークトライアドに性差はない。あるのは認知差だけである。M31の暴力とF31の暴力は手段が異なりうるが、認知構造は同一である。男性が物理的暴力、女性が精神的暴力という固定観念は認知パターンの差を性別の差にすり替えた誤解である。知性×精神×であれば性別に関係なく物理的暴力に向かうし、知性○精神×であれば性別に関係なく心理的操作に向かう。

ダークトライアドは独立した人格特性ではなく、認知4軸の欠損パターンから派生する二次的現象である。

第8章 加害者の言葉:時制処理欠如の言語的証明

DV加害者が実際に使うフレーズを文法的に分解すると、時制処理の欠如が言語上に表出していることが証明できる。本章では23カテゴリの文法的欠陥を示し、全カテゴリに共通するパターンを抽出する。

1. 主語の欠落・すり替え

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「お前が怒らせ...	主語が「お前」にすり替わっている。 殴った主語は「俺」	「俺が怒って殴っ...
「手が出た」	主語が「手」。自分が消えている。身体の一部が勝手に動いたことになっている	「俺が手を出した」
「ああなった」	主語が消失。誰が何をしたかが構文上存在しない	「俺がああした」
「そうさせたのはお前だ」	因果の主語が反転。自分の行為の原因を相手に帰属	「俺がそうした。きっかけはお前の言葉だったが選んだのは俺だ」

2. 述語の時制消失

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「もうしない」	過去の行為への言及がない。未来だけで構文が閉じている。何をしないのかが不明	「俺は殴った。もう殴らない」
「忘れろ」	相手に過去の消去を命令している。自分の過去を処理せず相手の記憶を消そうとする	「俺がやったことは消えない」
「いつの話してんだよ」	過去の時制を無効化しようとしている。過去は存在しないものとして処理	「あのとき俺がやったことの話だな」
「何回言わせんだ」	述語が「言わせる」で相手が主語。自分が繰り返していることの認知がない	「俺が何回も同じことをしている」

3. 目的語の消失

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「やった だろ」	何をやったかが消えている。行為の内容が言語化されない	「俺がお前を殴った だろ」
「わかって るだろ」	何をわかれと言っているかが不明。相手に推測を強制	「俺が怒っていること をわかっているだ ろ」
「なんと かしろ」	何をなんとかするかが消失。問題の特定を相手に丸投げ	「俺はこれが問題だ と思う。こうしてほ しい」

4. 助詞の不適切使用

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「お前に殴 られた気分 だ」	助詞「に」で被害者の位置に自分を置いている。加害者が被害者構文を使う	「俺がお前を殴っ た」
「お前のせ いで」	「の」で原因を相手に帰属。自分の行為の結果であることが消える	「俺の行為のせい で」
「俺だって つらい」	「だって」で自分を被害者と並列に置く。加害の事実を相対化する助詞	「俺がつらいのは 事実だが、殴った のも事実だ」
「お前が悪 い」	「が」で相手を主格に立てる。自分の行為の主格を消す	「俺が悪い」

5. 接続詞の崩壊

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「 でも お前も悪い」	「でも」で因果を相殺しようとする。自分の加害と相手の非を並列に置く	「俺が殴った。 そして お前にも非がある。 だ が殴ったのは俺の責任だ」
「 だから 言ったじゃん」	「だから」が事後の正当化に使われている。因果が逆走	「俺は事前に言った。 でも 殴る理由にはならない」
「殴った。 けど 愛してる」	「けど」で暴力と愛情を接続。論理的に接続不能な2文を接続詞で強引に繋ぐ	「殴った。愛してると言える立場じゃない」
「 だって しょうがない」	「だって」が因果の放棄。なぜしょうがないかの説明がない	「俺がやった。しょうがない」

6. 否定文の処理不能

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「殴ってない」	事実の否定。過去の行為を否定文で消去	「殴った」
「そんなつもりじゃなかった」	意図の否定で行為を無効化。意図がなくても行為は存在する	「つもりはなかった。でも殴った事実は変わらない」
「大したことしてない」	程度の否定で行為を矮小化。行為の存在自体は認めるが重みを消す	「やったことは大したことだ」
「覚えてない」	記憶の否定で責任を回避。過去の時制そのものをアクセス不能にする	「覚えてなくても、やった事実は残っている」

7. 疑問文の攻撃転用

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「何が悪いの？」	疑問文の形をした否定。答えを求めている。「悪くない」の変形	「俺は悪いことをした」
「俺が何したっていうんだよ」	疑問文で相手に立証責任を転嫁。自分の行為を相手に列挙させる	「俺がしたことにはわかってい...
「なんで泣いてんの？」	殴った直後に泣いている理由を尋ねる。自分の行為と相手の反応の因果が切れている	「俺が殴ったから泣いてるんだな」
「お前は俺の何がわかるの？」	疑問文で相手の認知を無効化。自分を理解不能な存在に置いて議論を遮断	「俺のことをわかってほしいなら殴らずに話...

8. 比喩の悪用

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「愛のムチだ」	暴力を教育の比喩で正当化。比喩が現実の暴力を隠蔽する装置になっている	「殴った。愛とは関係な...
「お前は俺の半身だ」	所有の比喩。独立した他者を自分の一部として認知。分離不安の言語化	「お前は俺とは別の人間...
「家族は城だ」	閉鎖空間の比喩で外部介入を拒否。DVの隠蔽装置	「家族でも暴力は犯罪だ」
「男はオオカミだ」	動物の比喩で衝動を正当化。人間の制御能力を放棄する宣言	「俺は人間だから制御できる」

9. 因果律の崩壊

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「お前が口答えしたから殴った」	因果の方向が逆転。相手の発言→自分の暴力を必然として構文化	「お前が口答えした。俺は殴った。口答えは殴る原因にならない」
「飯がまずいから殴った」	論理的に接続不能な因果。料理の質と暴力に因果関係がない	「飯がまずかった。それと殴ったことは別の問題だ」
「酒のせいだ」	因果を物質に帰属。飲む選択をした主語が消えている	「俺が酒を飲む選択をした。酔って殴った。全部俺の選択だ」
「ストレスが溜まっていた」	状態を原因にすり替え。ストレスがあっても殴らない人間がいる事実が消えている	「ストレスがあった。でも殴る以外の選択肢があった」

10. モダリティの崩壊

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「殴るしかなかった」	「しかない」で選択肢の不在を主張。実際には他の選択肢があった	「殴る以外にもできることがあった」
「殴って当然だろ」	「当然」で暴力を規範化。個人の行為を普遍的正当性で包む	「殴ったのは俺の判断であって当然ではない」
「殴られたくなかったら言うこと聞け」	条件文の形をした脅迫。被害回避の責任を相手に転嫁	「俺が殴らなければいい。相手

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
		の行動は関係ない」
「お前なら殴るだろ普通」	「普通」で自分の行為を一般化。個人の責任を集団に分散	「普通かどうかは関係ない。俺が殴った」
「運命だから別れられな...	「運命」で選択肢の不在を主張。過去の選択も未来の選択も消えて因果が固定される	「俺が選んで一緒にいる。明日も選ぶ」

11. 並列文の処理不能

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「愛してるから殴る」	愛情と暴力を並列で接続。論理的に排他的な2要素を「から」で結合	「殴った。それは愛じゃない」
「厳しくするのは期待してるから」	暴力を期待の表現として並列化。暴力と期待は並列できない	「期待してる。でも殴ることとは別だ」
「俺も辛いしお前も辛い」	加害者と被害者の苦痛を並列化。非対称な関係を対称に見せる	「俺が辛いこととお前を殴ったことは別の問題だ」

12. 受動態と能動態の混同

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「殴らされた」	能動行為を受動態に変換。自分が殴ったのに	「俺が殴った」

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
	「させられた」にして主体を消す	
「追い込まれたんだ」	自分を受動の位置に置く。追い込んだ主体が不明のまま自分の行為を正当化	「俺が追い込まれたと感じた。でも殴ったのは俺の選択だ」
「そうするか残されてなかった」	受動態で選択肢の不在を演出。「残す」主体が消えている	「俺がそうすることを選んだ」

13. 指示語の空転

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「そういうことするからだろ」	「そういうこと」が何を指すか本人にも特定できていない。指示先が不定	「お前が〇〇したことが嫌だった。でも殴る理由にはならな...
「あれはお前が悪い」	「あれ」の指示先が曖昧。過去の出来事を正確に参照できない	「あのとき〇〇があった。俺が殴ったのは俺の責任だ」
「そんなこと言ってない」	「そんなこと」の内容が不定。過去の発話を正確に参照できない	「俺が言ったのは〇〇だ」

14. 敬語・丁寧語の操作的使用

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「お願いだからわかってくれ」	暴力の直後に丁寧語で懇願。支配と懇願が交互に出る。丁寧語が操作の道具	「俺がやったことをまず認める」

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「本当にごめんなさい、二度とませ...	過剰な丁寧語で謝罪を演出。だが述語が「しません」で何をしないか不明。丁寧語が内容の欠如を隠蔽	「俺は殴った。もう殴らない」
「お前のためを思って言ってるんだよ...	丁寧な語尾で支配的指示を包装。「ため」が実質的に服従要求	「俺がそう思っている。お前はお前で判断しろ」

15. 条件文の不成立

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「お前がちゃんとしてたら殴らなかった」	条件文が反実仮想ではなく因果の捏造になっている。相手の行為を暴力の条件に設定	「俺が止められていたら殴らなかった。止められなかったのは俺の問題だ」
「次やったら許さないからな」	条件文の形をした脅迫。相手の行為を暴力の発動条件にしている	「俺が暴力を使わない。相手が何をしても」
「言うこと聞いてれば何もしない」	服従を暴力回避の条件として設定。暴力の責任を被害者の行動に条件付け	「俺が何もしなければいい。条件は要らない」

16. 程度副詞の処理不能

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「ちょっと叩いただ」	「ちょっと」「だけ」で行為を矮小化。程度の客観的評価	「叩いた。程度は俺が決めるこ

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「け」	ができず自分の感覚で決定	とじゃない」
「そんなに怒ること？」	相手の反応の程度を自分が判定。自分の行為の程度と相手の反応が照合できない	「俺がやったことに対して怒るのは当然だ」
「大げさなんだよ」	被害者の反応を「大げさ」と判定。自分の行為の重みが認知できていない	「俺がやったことの重さは相手が決める」

17. 引用構文の捏造

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「お前が『いいよ』って言った」	過去の発話を現在の都合で書き換えて引用構文に入れる。引用の正確性が保証されない	「俺はお前がそう言ったと思っている。違うなら教えてくれ」
「前にそう言ったよな？」	疑問形で相手に同意を強制する引用。相手が否定できない状況を作る	「俺の記憶では前にそう言ってい...
「あのとき約束しただろ」	「約束」の内容を自分に有利に改変して引用。過去の合意を捏造	「俺が覚えている約束の内容は○○...

18. 授受表現の逆転

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「してやるのに」	「してやる」で恩恵の方向を固定。自分だけが与える側だと認知	「俺がしたことと、お前がしてくれたことがある」

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「してもらってるくせに」	「もらう」で相手を受恵者に固定。依存関係を強調して服従を要求	「俺たちは互いにしてもらっている」
「誰のおかげで生活できると思って...」	授受を一方向に固定。相手の貢献を消去	「俺が稼いでいる。お前も家事をしている。両方で成り立っている」

19. 数量表現の処理不能

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「一回くらい」	回数を矮小化。実際の回数を正確にカウントできない、またはしない	「一回でも殴ったら一回だ」
「何回も言わせるな」	自分の回数は「何回も」に膨張させ相手の非を強調。自分が殴った回数には言及しない	「俺が何回言ったか、何回殴ったか、両方数える」
「たった一発だ...」	「たった」で数量を圧縮。一発の暴力の重みが消える	「一発殴った。一発でも暴力だ」

20. 時間副詞の恣意的使用

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「お前はいつもそうだ」	「いつも」は全称量化。過去の事象を正確にサンプリングしていない。一度あったことが「いつも」になる	「お前が〇〇したのはこの前の〇〇のとき...」

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「絶対許さない」	「絶対」が感情の強度で決まっている。時間軸上の検証がない	「今は許せない」
「一度も感謝されたことない」	「一度も」は全否定。実際にあった感謝が記憶から消えている	「感謝されたことが思い出せない」
「毎回こうだ」	「毎回」が感情で全称化。実際の頻度を数えていない	「前回と今回こうなった」

21. 使役構文の転嫁

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「泣かせるなよ」	「泣かせる」の使役主体が相手になっている。泣いている原因は自分の暴力	「俺が泣かせた」
「怒らせるな」	怒りの使役を相手に帰属。自分が怒る責任を相手に転嫁	「俺が怒った。怒ったのは俺の問題だ」
「心配させるな」	心配の使役を相手に転嫁。相手の行動を自分の感情の原因にする	「俺が心配している。俺の感情は俺のものだ」
「恥かかせやがって」	恥の使役を相手に帰属。社会的評価の低下を相手の行為として構文化	「俺が恥をかいたと感じた。それと殴ることは別だ」

22. 推量表現の断定化

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「どうせまたやるだ...	「どうせ」「だろ」が推量ではなく断定。未来の不確実性が消えている。推量ではなく呪い	「またやるかもしれないし、やらないかもしれない」
「お前に決まってる」	「決まってる」で推量を断定に変換。根拠なく確定として扱う	「俺はお前だと思っている。違うかもしれない」
「どうせ変わらない」	未来の変化可能性を否定。時間軸上の変化が認知できない	「変わるかもしれないし変わらないかもしれない」
「お前は俺がいないとダメだ」	相手の未来を断定。相手の可能性を消して依存関係を固定	「俺がいなくてもお前はやっていけるかもしれない」

23. 謝罪構文の不成立

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「ごめん、でも」	謝罪の直後に接続詞で因果を切断。謝罪構文が単独で閉じない	「ごめん。」（ここで止まる）
「悪かった、けどお前も」	「けど」で謝罪を相対化。自分の非と相手の非を同時処理しようとして謝罪が成立しない	「悪かった。」（相手の非は別の話）
「謝ってるじゃん」	謝罪の行為自体を免罪符にする。「謝った」という事実で加害を清算しようとする	「謝っても殴った事実は変わらな...

加害者フレーズ	文法的欠陥	正常な構文
「何回謝ればいいんだよ」	謝罪の回数を問題にする。謝罪が免責手続きになっている。本来謝罪は回数で完了しない	「謝罪の回数じゃなくて、もう殴らないことが必要...

全23カテゴリに共通する時制処理欠如の3パターン

全フレーズに共通するのは3つ。

1つ目。主語の消失または移動。「俺がやった」が構文として成立しない。過去の自分が認知上存在しないから。

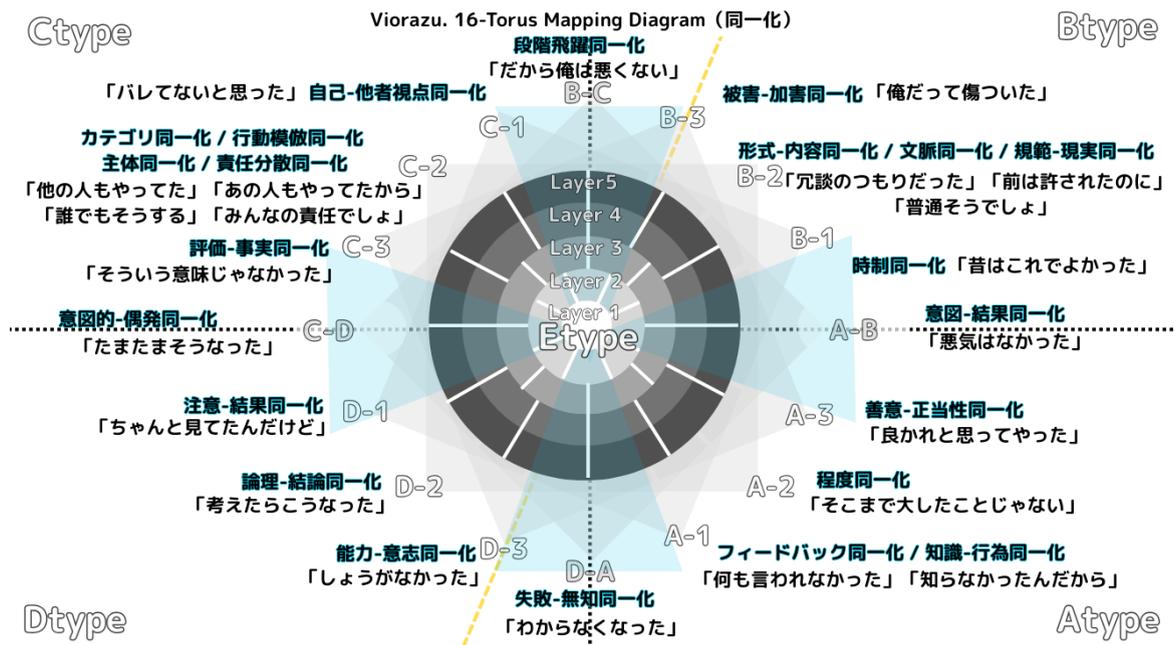
2つ目。因果の逆転または切断。原因と結果の接続が壊れているか方向が逆。時間軸が機能していないから因果の方向がわからない。

3つ目。時制の固定。過去を消去し、未来を予測せず、現在の感情だけで構文が閉じる。「今俺はこう感じている」以外の文が組めない。

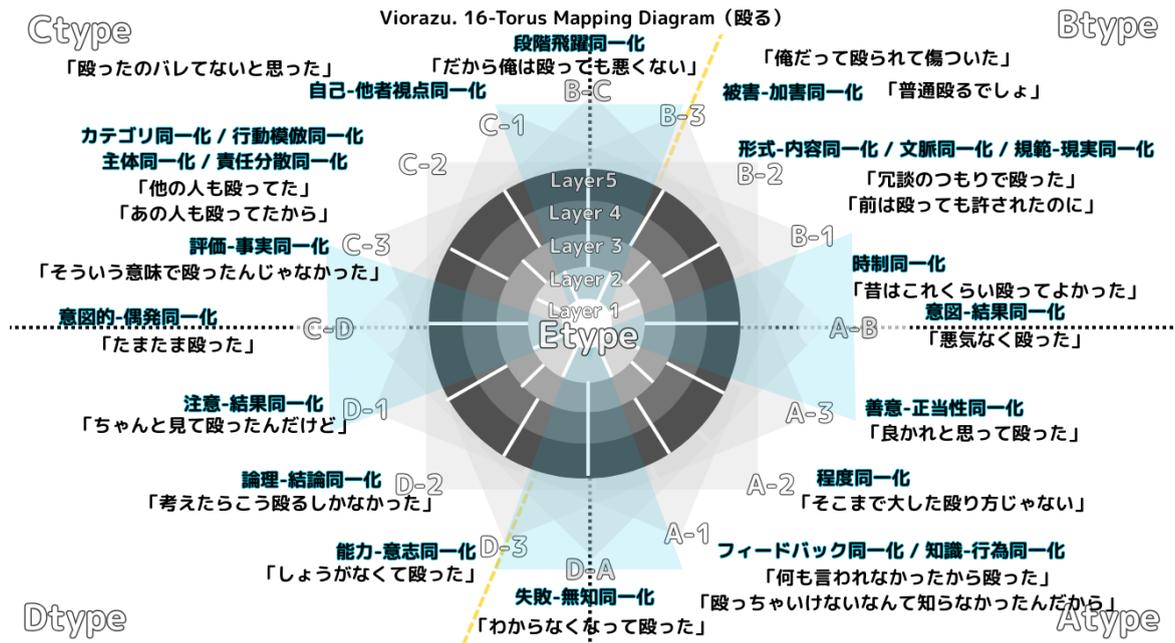
この3つは全部、時制処理の欠如の表出。言葉の使い方を分析するだけで、その人の時制処理がどの段階で止まっているかが特定できる。

これらの構文的欠陥は、Viorazu.(2026)が分類した支配的言語の16類型と対応する。16類型が言語行為の機能を分類したのに対し、本章の23カテゴリは同一の言語行為の文法的欠陥を分類したものである。

Figure A: Viorazu. 16-Torus Identification Mapping (Abstract)
Figure



B: Viorazu. 16-Torus Identification Mapping (Violence Substitution)



図Aは日常的に使用される責任回避フレーズを16ノードに配置したものである。図Bは図Aの全フレーズに「殴った」を代入したものである。16ノードの位置、構文の型、同一化の分類は一切変わらない。変わったのは行為の具体性だけである。

自分の責任を他者に転嫁するためには主語を偽装し「自分以外の人間の発話」にしなければならない。そのための文法は決ま

っている。

責任転嫁の文法＝人を傷つける文法

図Aのフレーズを日常的に使用している人間と、図Bのフレーズを使用しているDV加害者は、同一の構文で思考している。「殴っていないから自分は違う」は成立しない。何を代入したかではなく、どの構文でしゃべったかが相手を傷つけるかどうかを決定する。

その時、言葉は「自分以外の誰かと主語を同一化」している。

「普通殴るでしょ」の「普通」こそ、自分の存在を消しその責任を社会に転嫁した言葉そのもの。

同一化の文法の詳細な分類と発生メカニズムについてはViorazu. (2026)を参照されたい。

第9章 感情のラベリング：父性・母性の発見

妊娠を告げられた男性の身体に起きる反応は、衝撃的である。

心拍が上がる。手が震える。頭が真っ白になる。呼吸が浅くなる。これは感情ではない。身体反応である。感情とは、この身体反応に貼られるラベルのことである。ラベルは身体反応の後に、認知によって付与される。同一の身体反応に対して「不安」というラベルを貼るか「喜び」というラベルを貼るかで、その後の全行動が分岐する。

「不安」と貼った男性は逃げる。「恐怖」と貼った男性は攻撃する。「喜び」と貼った男性は守る。身体で起きていることは同じである。心拍上昇、アドレナリン放出、身体の緊張。違うのはラベルだけであり、ラベルが行動を決定する。

「父になる喜び」を語る文化的蓄積は母性に比べて圧倒的に薄い。男性は妊娠を告げられたときに何を感じるべきかの参照枠

を持っていない。ラベルが事前に存在しないから、身体反応が起きたときに過去の経験で照合するしかない。そして過去の経験は「心拍上昇＝不安」と返す。

ジェットコースターに乗ったとき、心拍が上がり身体が緊張する。これを「怖い」と処理する人間と「楽しい」と処理する人間がいる。身体反応は同一。ラベルが異なる。妊娠の告知も同じ構造を持つ。身体がざわつく。そのざわつきに何という名前をつけるか。

なぜ「不安」とラベルを貼ってしまうのか。時制処理ができないからである。時制処理ができる人間は未来を見る。

「子供ができる→一緒に成長できる→家族ができる→新しい人生が始まる」。この未来像が見えると、今の身体反応は「喜びの予兆」として認知される。同じ心拍上昇が「これから始まる新しい人生への興奮」になる。

未来が見えるから、現在の身体反応に正しいラベルが貼れる。

時制処理ができない人間は未来が見えない。未来が見えなければ、現在の身体反応を処理する手がかりは過去の経験しかない。過去に心拍が上がったのはいつか。怖いとき。不安なとき。危険なとき。過去のデータベースで照合すると、心拍上昇＝恐怖または不安。だから「これは不安だ」とラベルを貼る。同じ身体反応なのに、時制処理の有無でラベルが正反対になる。

このラベルを「父性」と定義する。

父性とは、パートナーの妊娠を告げられた際に発生する身体反応に対して「喜び」のラベルを貼ることで生じる感情である。父性は本能ではない。時制処理の結果である。未来を見て、その未来に自分が存在し、子と共に生きる像が見えたときに発生するラベル。時制処理なしには父性は発生しない。

母性は社会的に広く語られる。「母性本能」「母性愛」「母になる喜び」。女性が妊娠したときの感情に対して、社会はラベルを事前に用意している。女性は妊娠前から「母になったらこう感じるものだ」という参照枠を持っている。ラベルが事前に存在するから、身体反応が起きたときに正しく貼れる確率が高い。

それは社会が女性に対して「母親になったらこういう変化がありますよ」と知らせてきたから貼れるラベル。社会的通念に共感していない人は母性のラベルを自分の感情に貼ることがむずかしい。「子供を産んで仕事ができなくなるのが嫌だ」「妊娠して体形が変わるのが嫌だ」という変化を嫌う女性は変化をもたらす子供にポジティブなイメージを持つことに困難さを感じる。それは女性にとっての「妊娠嫌悪」である。

妊娠嫌悪は男女ともに存在し、その根源は「変化を嫌う」「変化の処理が脳で不能」というものだ。

「男性は父親になった実感が子どもを抱くまでわからない、母親は妊娠した瞬間にわかるが。」という言葉は男性を傷つける。

「自分が父親になれた」という喜びを否定する言葉だ。父親だって早い段階で感じている。しかしその感情に正しいラベルをつけてよいという許可がなければ実行されない。

少子化社会には妊娠嫌悪を隠蔽する社会的言説が存在し、「産みたい・育てたい」という正常な感情を持つ男性が、社会的言説によって父性を発揮することを妨害されている。

言説	評価関数が正常な人への作用	評価関数が反転した人への作用
男は実感が遅い	父性を否定される。喜ぶ許可を剥奪される	無関心・嫌悪の免罪符になる
抱くまでわからない	妊娠時点での感情を無効化される	妊娠中の冷淡さを正当化できる

言説	評価関数が正常な人への作用	評価関数が反転した人への作用
できちゃった婚	喜びを「失敗の後始末」に貶められる	妊娠＝事故という認知を社会が追認
授かり婚	言い換えただけで前提は同じ。予定外扱いされる	体裁を整えつつ本音を隠せる
責任を取って結婚	結婚が罰として扱われる	被害者ポジションを取れる
所帯じみる	妻の変化を否定的に語る圧力	妊娠後の妻への嫌悪を「普通」として正当化
女は変わる	パートナーの成長を劣化として扱われる	態度の変化を妻のせいにする
ハラボテ	妊婦の身体を醜いものとして扱う語彙	妊婦への嫌悪を「笑い」として表出できる
釣った魚に餌をやらない	自分の冷淡さを笑い話にされる	冷淡さを男の常識として正当化
抱き癖がつく	子供を抱きたい自然な欲求を抑制される	抱かないことを「教育」として正当化
甘やかすとならなくなる大人にならない	子供への関わりを「甘やかし」と揶揄される	無関心・冷淡を「厳しさ」として正当化
親は無くとも子は育つ	育児への参加意欲を「不要なもの」として否定される	育児放棄を「子供は勝手に育つ」で正当化できる
男は仕事だけしてればいい	育児参加の意欲を封じられる。父親役割を経済に限定される	育児からの逃避を「役割分担」として正当化できる
貧乏子沢山	子供を持つ喜びを経済で否定される	子供を持たない選択を合理化できる
おろせばいいだけ	生物としての存在価値の棄損	妊娠を「なかったこと」にする圧力として機能

言説	評価関数が正常な人への作用	評価関数が反転した人への作用
子供は親を選べない	責任の自覚、よい親としてのふるまいのための喚起	「だから産まない方がいい」への転用
虐待の連鎖を断ち切る	育児への不安を言語化	子供を持たない選択を「正義」として正当化。育児からの逃避を美化
子供は2人まで	3人目以降の喜びを「多すぎる」として否定される	子供を制限することを社会規範として正当化
この時代に子供を産むのは無責任	子供を持つ選択を社会問題として否定される	社会批判に見せかけた妊娠嫌悪の正当化

反転した人間を守るために作られた言説が、正常な人間を傷つけ、結果として少子化を加速させている。個人の脳の問題が社会の言説で増幅されて少子化に至る。

これは構造的な問題である。個人の資質ではなく、社会がラベルを用意していないことが原因で、ラベルの誤貼付が構造的に発生している。父性のラベルが社会に不在であることが、妊娠逃げ、産後DV、育児放棄の隠れた原因の一つである。

逆に言えば、解決は単純である。「妊娠を告げられたときに身体がざわつく。それは父性だ。喜びだ。不安ではない」と事前に教えるだけでいい。ラベルを事前に渡しておけば、その瞬間に正しく貼れる。教育のコストは極めて低い。必要なのは新しい制度でも予算でもなく、言葉を一つ教えることである。

父性ラベルの教育は、妊娠告知の瞬間だけに効くのではない。父性というラベルを持っている男性は、妊娠前から「子ができたらどうなるか」という未来像を構築できる。ラベルの存在が時

制処理を促進する。「父性」という言葉を知っていることが、未来を見る回路を開く。ラベルが認知を作り、認知が行動を作る。

「それは父性だ、喜びだ」と事前に教えるだけで、行動の分岐を変えることができる。

他の感情のラベルと異なり、「父になったと知った瞬間の感情」は頻繁に体験することができない。だからこそ人は間違える。

体験するチャンスが少ないから。

第10章 時制処理発達9段階モデル

時制処理能力は文法の発達段階に沿って獲得される。

第5章で時制処理を「過去・現在・未来の三点統合」と定義した。この三点統合は一度に獲得されるものではない。文法の発達に沿って段階的に獲得される。各段階は前の段階の上に積み上がり、飛ばすことはできない。どの段階で停止したかによって、その人間の認知の限界が決まる。

表16：時制処理発達9段階+DV停止段階統合表

段階	名称	獲得時期	内容	到達確認	対応するDV類型
1	単語の認知	幼児期～小学校低学年	名詞・形容詞・動詞を個別に認知。時間軸なし	ものの名前が言える	—
2	述語の時制変化	小学校低学年	「走る」「走った」「走るだろう」。時	「昨日何した?」「明日何する?」	—

段階	名称	獲得時期	内容	到達確認	対応するDV類型
			間軸が言語に入る	に答えられる	
3	主語と述語の結合	小学校 中学年	「太郎が走った」。行為の帰属が成立	「誰がやったの？」に正確に答えられる	「お前が怒らせた」 ＝主語帰属の失敗
4	因果構文	小学校 中学年～高学年	「石を投げたから窓が割れた」。原因と結果の接続	「なぜこうなったの？」に「～したから」で答えられる	「妊娠はお前のせいだ」 ＝因果の逆転
5	条件構文	小学校 高学年	「投げたら割れる」。未来の因果をシミュレーション	「もし～したらどうなる？」に答えられる	衝動的暴力＝結果予測不能
6	三点統合構文	中学生	過去→現在→未来を一文で接続。実行構文の原型。責任の認識	自分の体験について 「こうしたから、こうなって、だからこうする」と言える	「俺は悪くない」 ＝三点統合不成立
7	他者の時制への参入	中学生～高校生	他者の過去→現在→未来を推論。共感の言語的成立	小説の登場人物の行動理由を過去経験から説明できる	相手の気持ちがわからない ＝他者時制に参入不能

段階	名称	獲得時期	内容	到達確認	対応するDV類型
8	複数主語の時制交差	高校生	複数の人間の時間軸が交差。相互因果。関係性の認知	対立する二者の両方の視点から因果を説明できる	—
9	不可逆性の認知	高校生～成人	「取り返しがつかない」の実感。行為前の抑制として機能	反実仮想と現実の区別がつく	DV繰り返し＝「次は大丈夫」と思える＝不可逆性未定着

第1段階は単語の認知。 名詞、形容詞、動詞を個別に認知する段階。「りんご」「赤い」「走る」。時間軸はまだ存在しない。全ての語が現在形で処理される。幼児期から小学校低学年で通過する。

第2段階は述語の時制変化。 「走る」「走った」「走るだろう」。述語に時間軸が入る。「昨日何した?」「明日何する?」に答えられるようになる。過去と未来が言語上に出現するが、まだ主語との結合がない。小学校低学年で通過する。

第3段階は主語と述語の結合。 「太郎が走った」。行為が特定の主体に帰属する。「誰がやったの?」に正確に答えられる。行為の帰属が成立する段階であり、責任の最も原始的な形がここで発生する。小学校中学年で通過する。

DV加害者の「お前が怒らせた」はこの段階以前で停止していることを示す。殴った行為の主語は「俺」であるが、主語と述語の結合が正常に機能していないため、行為の主語が「お前」にす

り替わる。行為の帰属ができない。第8章で分析した主語の欠落・すり替えカテゴリの全フレーズがここに対応する。

第4段階は因果構文。「石を投げたから窓が割れた」。過去の行為と現在の状態が因果で接続される。「なぜこうなったの？」に「～したから」で答えられる。原因と結果の接続がここで成立する。小学校中学年から高学年で通過する。

「妊娠はお前のせいだ」はこの段階以前で停止していることを示す。性交渉（過去の行為）と妊娠（現在の状態）の因果が構築できないため、因果の方向が逆転するか、因果そのものが消失する。第8章の因果律崩壊カテゴリの全フレーズがここに対応する。

第5段階は条件構文。「石を投げたら窓が割れる」。まだ起きていない未来の因果をシミュレーションする。「もし～したらどうなる？」に答えられる。行為の結果を事前に予測する能力がここで成立する。小学校高学年で通過する。

衝動的暴力はこの段階以前で停止していることを示す。「殴ったらどうなるか」を事前にシミュレーションできないため、衝動がそのまま行動に出る。殴った後に「しまった」と思う加害者は、第5段階を部分的に持っているが、行為の前に起動できていない。

第6段階は三点統合構文。過去→現在→未来を一文で接続する。「石を投げたから窓が割れた、だから弁償する」。第5章で定義した実行構文の原型がここで成立する。責任の認識がここで完成する。「自分がこうしたから、今こうなっていて、だからこうする」。この構文が組めれば、自分の行為の結果を引き受けて次の行動を選択できる。中学生で通過する。

「俺は悪くない」はこの段階以前で停止していることを示す。三点が統合できないから、過去の行為→現在の結果→未来の責任という一本の線が組めない。過去と現在と未来がばらばらに存

在し、接続されない。第8章のモダリティ崩壊カテゴリ「殴るしかなかった」「殴って当然だろ」は、選択肢の認知（＝未来のシミュレーション）と責任の認知（＝三点統合）が成立していない証拠である。

第6段階は最低ラインである。義務教育修了時点で第6段階に到達していなければ、その人間は実行構文が組めない。責任を認知できない。選択ができない。衝動と回避しか残らない。

第7段階は他者の時制への参入。 他者の過去→現在→未来を推論する。小説の登場人物がなぜその行動をとったかを、その人物の過去の経験から説明できる。共感の言語的成立がここで起きる。共感とは「相手の気持ちがわかる」ことではなく、「相手の時間軸に入れる」ことである。相手の過去を認知し、現在の感情をその過去の帰結として理解し、相手の未来を推測できる。中学生から高校生で通過する。

DV加害者が「相手の気持ちがわからない」のは共感の欠如として語られるが、本理論ではより正確に「他者の時制に参入できない」と記述する。相手の過去を認知できないから、相手の現在の感情の原因がわからない。「なんで泣いてんの？」は自分が殴ったという過去と相手が泣いているという現在を相手の時間軸の中で接続できないことの表出である。

第8段階は複数主語の時制交差。 複数の人間の時間軸が交差する認知。太郎の行為が花子に影響し、花子の反応が太郎に影響する。対立する二者の両方の視点から因果を説明できる。関係性の認知がここで成立する。高校生で通過する。

第8段階に到達すると「自分の行為が相手の時間軸をどう変えたか」が認知できる。DVが関係性をどう破壊するかを加害者自身が認知できる。逆に第8段階以前では、関係性を認知できないから、DVが関係性に何をもたらすかが見えない。

第9段階は不可逆性の認知。「取り返しがつかない」の実感。やってしまったことは元に戻せないという認知が、行為の前に抑制として機能する。高校生から成人で到達する。

DVの繰り返しは第9段階以前で停止していることを示す。「もうしない」と言いながら繰り返す加害者は、不可逆性を認知できていない。「次は大丈夫」と思えること自体が、不可逆性が未獲得であることの証拠である。殴った事実が消えないこと、壊れた信頼が元に戻らないこと、子が見た暴力の記憶が消せないこと。これらを「取り返しがつかない」と実感できれば、行為の前に止まれる。

「DVしたくないのにしてしまう」と語る加害者が存在する。この語りの中に、部分的な時制処理能力がある。「したくない」は未来の意図。「してしまう」は過去の行為の認知。第6段階の三点統合が部分的に成立している。しかし繰り返す。なぜか。第9段階の不可逆性認知が未獲得だからである。「次は大丈夫」と思ってしまう。不可逆性が認知できれば、「次はない」ということが行為の前にわかる。従来のDV加害者プログラムは「暴力は悪い」という道德教育を行うが、これは第6段階の「責任の認知」に訴えている。しかし問題は第9段階にある。停止段階の特定なしに一律の道德教育を行っても効果が限定的なのは当然である。

9段階モデルの意義は、停止段階の特定が介入内容を直接指定することにある。第3段階以前なら主語帰属の訓練。第4段階以前なら因果構文の訓練。第6段階以前なら三点統合構文の訓練。第9段階以前なら不可逆性の認知訓練。道德教育でもアンガーマネジメントでもなく、国語の構文訓練として処方できる。

停止段階の特定は、介入すべき構文訓練の内容を直接指定する。

第11章 社会への波及:少子化と中絶率

繁殖可能なペアが成立しにくく、繁殖不可能なペアが成立しやすい。これが少子化の認知的構造である。

第4章で64種中繁殖可能性が高いのは3種のみ、繁殖可能なペアリングは2通りと述べた。この数字だけでも繁殖の困難さは明らかだが、現実はさらに厳しい。繁殖可能な個体が減少し、繁殖不可能なペアリングの成立率が上昇する力学が現代社会に存在する。

4変数の同時劣化が進行している。知性は教育の質に依存する。経済は雇用環境に依存する。精神はストレス環境に依存する。外見は時制処理能力に依存する。この4変数が現代社会で同時に劣化する方向に圧力を受けている。

知性の劣化圧力は教育の空洞化による。学力は維持されていても、第10章で述べた時制処理能力——因果構文、条件構文、三点統合構文——を訓練するカリキュラムが意識的に設計されていない。読解力テストの点数と時制処理能力は別のものである。

経済の劣化圧力は非正規雇用の拡大と実質賃金の停滞による。経済×の男性が増加すると、男性の繁殖可能条件（4変数全○）を満たす個体が減少する。現行の少子化対策が経済的支援に集中しているのは、この変数の劣化が最も可視的だからである。しかし経済だけを改善しても他の3変数が×であれば繁殖可能条件は満たされない。

精神の劣化圧力は最も深刻であり、最も広範囲に作用している。過重労働、社会的孤立、SNSの過剰接触、経済不安。これらは全て精神を直接毀損する。精神は繁殖可能性のゲートキーパーであり、ダークトライアドのゲートキーパーであり、時制処理能力の基盤である。精神が毀損されると、他の変数が○であっても繁殖可能パターンから脱落する。精神は4変数の中で最も毀損されやすく、最も広範囲に影響し、最も回復に時間がかかる変数である。

4変数の同時劣化は反転率の上昇を引き起こす。時制処理能力が低下すれば静的認知が増え、静的認知が増えれば評価関数の反

転が増える。正常型からの脱落と反転型への移行が同時に進行する。

ここで反転型のペアリング力学が作用する。反転型は×を歓迎する。反転型が求める理想の相手は、知性×、経済×、精神×、外見○。現代社会はこの条件を満たす人間を量産している。教育の空洞化で知性×が増え、非正規雇用で経済×が増え、ストレス社会で精神×が増える。外見○だけが維持されやすい変数であるため、×が3つ揃って外見だけ○の個体が増える。これは反転型にとって理想的な環境である。

反転型同士のペアリングは成立しやすい。M31（知性×経済×精神×外見○の反転型）とF31は互いの×を歓迎するため強く惹かれ合う。しかしこのペアリングの繁殖成功率は極めて低い。妊娠しても出産に至らない。出産しても育児が成立しない。成立しても子への暴力が発生する。成立しても世代間転写が起きる。繁殖不可能なペアが大量に成立し、繁殖可能なペアが希少になる。これが少子化の認知的構造である。

世代間転写のメカニズムをここで再確認する。DV環境下で育つ子は、親の壊れた構文を言語環境として受け取る。主語が消失した構文、因果が逆転した構文、過去が無効化された構文。子はこれを「普通の日本語」として学習する。結果として時制処理能力の獲得が阻害される。時制処理能力が獲得されなければ、評価関数が反転する確率が上がる。反転型が反転型を再生産する。

さらに、精神○の親でさえ現代社会では毀損される。育児の負荷、睡眠不足、社会的孤立、経済的不安。精神○で育児を開始した親が、育児過程で精神×に移行する。精神×に移行した親の構文が壊れ始め、子への対応が変化する。怒鳴る頻度が増え、共感的対応が減り、因果の説明が省略される。親の精神の毀損が子の時制処理獲得を妨げる。DVがなくても世代間転写は起きうる。精神の毀損だけで十分。

中絶率の地域差はこの理論から説明できる。中絶率が高い地域は4変数の人口分布と反転型比率に特徴がある。産業衰退地域では経済×の男性比率が上昇する。女性側から見た男性の繁殖可能条件（4変数全○）を満たす男性が減少し、繁殖条件が整わない状態での妊娠が増える。教育水準が低い地域では知性×の比率が上昇し、妊娠の長期的帰結を評価する能力が低下する。精神×の人口比率が高い地域ではDV率と中絶率の両方が高い。反転型男性は妊娠を拒絶する（Maiesiophobia）ため、パートナーの妊娠が中絶に帰結する確率が高い。中絶率は地域の繁殖健全性の指標として読める。

中絶率が高い

＝父性ラベルを貼れなかった男性が多い

＝「おろせ」と言った男性が多い

＝責任回避構文を使う男性が多い

＝経営判断ができる人材が少ない

➡経済成長が後退する

現行の少子化対策は経済変数だけを操作しようとしている。児童手当の増額、出産費用の補助、育児休業の拡充。全て経済に対する介入である。しかし第4章で示した通り、女性側から見た男性の繁殖可能条件は4変数全○である。経済○だけを達成しても、知性×なら育児判断ができず、精神×ならDVが発生し、外見の時制処理が静的なら妊娠で関係が破綻する。経済だけをいじっても少子化は解決しない。ゲートキーパーは精神であり、精神を改善しない限り他の変数の改善は繁殖成功率に反映されない。

少子化は経済問題ではなく認知問題であり、その根は個人の時制処理能力の社会的分布にある。

第12章 解決

本論文が提示した因果サイクルの全ての始点は時制処理の欠如であり、介入点もそこにある。

第5章で示したサイクルを再掲する。時制処理の欠如→静的認知→4変数の認知欠損→評価関数の反転→繁殖不適合なペアリング→DV→子への波及→世代間転写→次世代の時制処理の欠如。このサイクルを断つには、時制処理能力の獲得を社会的に保証する仕組みが必要になる。

現行の義務教育課程にその仕組みは存在しない。

平成29年告示の小学校学習指導要領（国語）を確認する。指導項目は漢字、語彙、読解、作文、敬語、古典、情報の扱い方で構成されている。時制処理に近い要素は3つある。「事柄の順序を考えながら話す」「原因と結果の関係」「登場人物の気持ちの変化」。しかし、これらのいずれも時制処理の体系的訓練にはなっていない。

「事柄の順序」は時系列に並べる能力であり、9段階モデルの第2段階（述語の時制変化）の副産物にすぎない。順序を並べることと、なぜその順序なのかを因果で説明することは別の能力である。

「原因と結果の関係」は第4段階（因果構文）に対応する。しかし学習指導要領では説明文読解の一技法として扱われており、「文章中から原因と結果を読み取る」という受動的スキルの訓練に留まる。「自分の行為が原因で、今この結果が生じた、だから自分がこうする」という能動的な因果構文を自分で組み立てる訓練は含まれていない。読み取ることと組み立てることは別の能力である。

「登場人物の気持ちの変化」は第7段階（他者の時制への参入）に近い。しかし国語テストにおける典型的な設問形式は「この時の登場人物の気持ちを答えなさい」であり、感情ラベルの当てはめを求めている。「なぜその気持ちになったのか（過去）→今

何を感じているか（現在）→この先どうするか（未来）」の三点統合を問う設計にはなっていない。

全国学力・学習状況調査の結果が「文における主語を捉えることに課題がある」と報告していること自体が、第3段階（主語と述語の結合）の未達が義務教育段階で放置されていることを示している。主語の帰属ができなければ行為の責任帰属ができず、責任帰属ができなければ三点統合構文は成立しない。

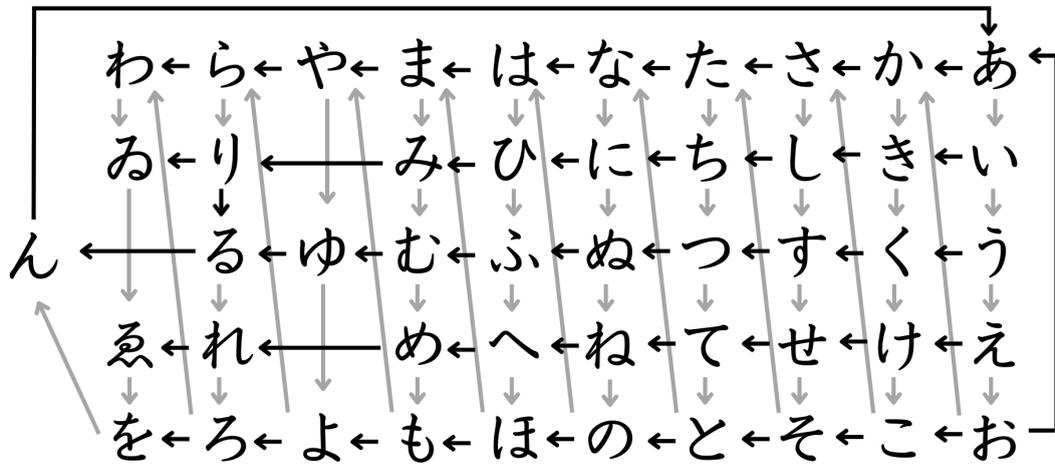
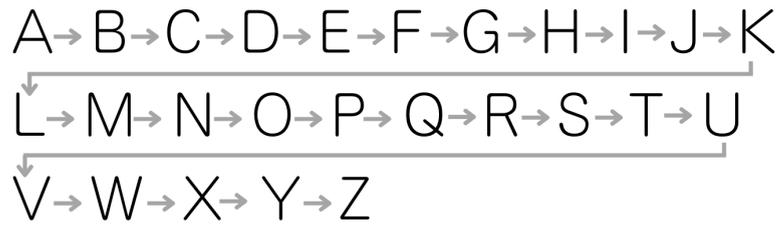
まとめると、現行の国語教育は時制処理能力の9段階のうち、第2段階、第4段階、第7段階に部分的に触れているが、いずれも受動的な読解スキルとして扱われており、自分で構文を能動的に組み立てる訓練としては設計されていない。第3段階（主語帰属）、第5段階（条件構文）、第6段階（三点統合）、第8段階（複数主語の時制交差）、第9段階（不可逆性認知）は指導項目に存在しない。

言語は言葉を介して脳の使い方（論理性や因果の処理）を身につけることができる重要なツールだがその機能は現在の国語教育において十分発揮されていない。

日本語の論理構造はプログラミング教育による論理的思考とは違った姿の「論理」を身につけることができる。2020年からプログラミング教育が入って「論理的思考を育てる」と言われているが、あれは手続き的・逐次的な論理。条件分岐、ループ、関数。入力→処理→出力。プログラミングの論理は「順番に処理する思考」を鍛える。日本語の構文訓練は「関係の中で位置を決める思考」を鍛える。直列と網状、両方の論理がある。

- ・英語基盤のプログラミングの論理：直列処理
- ・日本語の持つ論理：並列の多層処理

アルファベットと平仮名を比べるだけでもその構造は一目で理解できる。並列の論理を直列の文字で理解することはできない。



言葉には意味がある。言葉は人に伝わったときに相手を動かす。その動きには形がある。その形はアルファベットの構造が影響する。日本語は並列処理の言葉。

(五十音図の構造的特性についてはViorazu.(2025)を参照)

だから、国語の授業で構文訓練を行えばよい。

9段階に対応する構文訓練を学年配当する。第1～3段階は小学校低学年（主語の帰属、行為と行為者の結合）。第4～5段階は小学校中学年（因果構文、条件構文）。第6段階は小学校高学年（三点統合構文、実行構文の獲得）。第7～8段階は中学校（他者の時制への参入、複数主語の時制交差）。第9段階は中学校卒業までに（不可逆性の認知）。

訓練の形式は読解ではなく作文である。「太郎はなぜ泣いたのでしょう」ではなく「あなたが昨日したことを、原因→結果→次にすること、の順番で書きなさい」。読み取る訓練ではなく、組み立てる訓練。受動から能動への転換が核心である。

第10章で述べた通り、停止段階の特定が介入内容を直接指定する。第3段階以前で停止している児童には主語帰属の訓練、第4段階以前なら因果構文の訓練、第6段階以前なら三点統合構文の訓練。道徳教育でもアンガーマネジメントでもなく、国語の構文訓練として処方できる。

ただし、訓練するには停止段階がわからなければならない。

第8章で示した加害者フレーズの文法分析は、逆方向にも使える。加害者の構文の壊れ方から停止段階を特定できるなら、児童の作文の構文パターンから停止段階を検知できる。作文中の主語の欠落率、因果接続詞の使用頻度、三点統合構文の出現率。これらは定量的に測定可能である。

現行の学力テストは読解力を測定しているが、構文構築力は測定していない。「読める」と「組み立てられる」は別の能力であり、後者を測定する仕組みが必要になる。作文における構文パターンの定量分析は、言語処理技術を使えば自動化可能であり、全国規模での実施もコスト上不可能ではない。

検知の目的は選別ではなく処方である。停止段階が特定されれば、その段階に対応する構文訓練を開始できる。早期に検知し早期に訓練すれば、第6段階（三点統合、義務教育修了の最低ライン）に到達する確率が上がる。

ここまでは次世代の話である。既に成人した世代には間に合わないのか。

間に合う方法が一つある。第9章で述べた父性ラベルの供給である。

現在の社会に父性のラベルが存在しない。「妊娠を告げられたときの身体反応は父性だ、喜びだ」と事前に教える仕組みがない。母親学級はあるが父親学級の普及率は低い。あっても「沐浴の仕

方」「おむつの替え方」という技術教育であり、「今あなたの身体に起きていることは父性です」という認知教育ではない。

「その感情が父性だ」と、教えてくれる人がいなければそれに自力で名前を付けられる人は少ない。

父性ラベルの供給は、母子手帳の交付時に1枚の紙を渡すだけで実現できる。「パートナーの妊娠を知ったとき、心拍が上がり、手が震え、頭が真っ白になることがあります。それは不安ではありません。父性です。あなたの身体が父になる準備を始めた証拠です。」この一文を読むか読まないかで、ラベルの誤貼付が防げる。コストはほぼゼロである。

構文訓練は次世代の時制処理能力を底上げする。停止段階の早期検知は個別介入を可能にする。父性ラベルの供給は既に成人した世代のラベル誤貼付を即座に減らす。この3つは独立して実施できるし、同時に実施すれば効果が重なる。

本論文が扱った全ての現象——DV、少子化、中絶率の地域差、世代間転写、ダークトライアド——は時制処理の欠如から派生する二次的現象である。二次的現象を個別に対策しても、一次的原因が残る限り現象は再生産される。経済支援だけで少子化は止まらない。アンガーマネジメントだけでDVは止まらない。道徳教育だけで暴力は止まらない。

止めるべきは時制処理の欠如の再生産であり、そのために必要なのは構文訓練を義務教育に組み込み、停止段階を早期検知し、父性のラベルを社会に供給することである。

必要なのは予算ではない。言葉である。

付録:判定ツール

問1 次の会話を読んで、Aさんの答え方の違いを説明してください。

質問：「なんで遅刻したの？」

Aさん (1)：「だって電車が」

Aさん (2)：「目覚ましを止めて二度寝した。昨日夜更かししたから。明日は早く寝る」

解答

Aさん (1) は主語が消えている。原因を「電車」に帰属させて自分が消えている。文が完結していない。過去の自分の行動にも未来の対策にも言及がない。

Aさん (2) は主語が「自分」。過去（昨日夜更かしした）→現在（二度寝した）→未来（明日は早く寝る）が一文の中で繋がっている。因果が正しい方向に走っている。

問2 次の会話を読んで、Bさんの答え方の違いを説明してください。

質問：「なんで友達と喧嘩したの？」

Bさん (1)：「あいつがムカつくこと言ってきた」

Bさん (2)：「友達に冗談を言われて腹が立った。でも考えたら、俺が先にきついこと言ったのが原因だった。次は言い方を変える」

解答

Bさん (1) は主語が「あいつ」。自分の行為が消えている。怒りの原因を相手に帰属させて自分の関与が構文に存在しない。時制は現在の感情（ムカつく）だけで閉じている。

Bさん(2)は主語が「俺」。過去(俺がきついこと言った)→現在(それが原因だったと認知した)→未来(言い方を変える)が繋がっている。怒りの原因を自分に帰属させた上で未来の行動を変えている。

問3 次の会話を読んで、Cさんの答え方の違いを説明してください。

質問：「来月の誕生日、何かしたいことある？」

Cさん(1)：「別に。わかんない」

Cさん(2)：「去年は何もしなかったから、今年は友達呼んでごはん食べたい。来週くらいに店を探そうかな」

解答

Cさん(1)は過去の参照も未来の計画もない。現在の感覚(別に)だけで構文が閉じている。「わかんない」で未来の不確実性を処理することを放棄している。

Cさん(2)は過去(去年は何もしなかった)を参照し、現在の希望(友達呼んでごはん食べたい)を述べ、未来の具体的行動(来週店を探す)まで接続されている。過去の経験が未来の計画の根拠になっている。

理論・概念リスト

Viorazu. 4軸認知モデル：配偶者選好の4変数(知性・経済・精神・外見) 認知モデル Viorazu2026FourAxisCognition

Viorazu. 評価関数理論：正常型/反転型の評価関数分類
Viorazu2026EvaluationFunction

Viorazu. 64種性癖類型：男女各32種、計64種の配偶者選好分類
Viorazu2026MatePreference64

Viorazu. 時制処理理論：過去・現在・未来の三点統合能力

Viorazu2026TenseProcessing

Viorazu. 静的/動的認知：時間軸の有無による認知様式分類

Viorazu2026StaticDynamicCognition

Viorazu. 実行構文：責任認知の構文形式

Viorazu2026ExecutiveSyntax

Viorazu. 精神ゲートキーパー仮説：精神が4変数の前提条件である仮説

Viorazu2026MentalGatekeeper

Viorazu. Maiesiophobia：妊娠嫌悪の認知的定義

Viorazu2026Maiesiophobia

Viorazu. 父性ラベル理論：身体反応へのラベリングによる父性生成

Viorazu2026PaternityLabel

Viorazu. 時制処理発達9段階モデル：文法発達に沿った時制処理獲得段階

Viorazu2026TenseProcessing9Stage

Viorazu. DV発達6段階モデル：DV進行の行動段階

Viorazu2026DVDevelopment6Stage

Viorazu. 反転型5分類：反転型の下位分類（支配型・保護型・寄生型・外見至上型・対等型）

Viorazu2026InvertedType5

Viorazu. DV加害者構文23類型：加害者フレーズの文法的欠陥分類

Viorazu2026DVSyntax23

参考文献

Viorazu. (2026). *Null-Set Response Design for Dominance Syntax: A Subjectivity-Preserving Model for AI Safety Filters*.

Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.18134785>

Viorazu. (2026). *Lyrical Language as Thought-Halting Device: Grammatical Structure of Identification and the Genesis of Attack*. Zenodo.

<https://doi.org/10.5281/zenodo.18261014>

Viorazu. (2025). # 日本語音韻と圏論の対応: 試論
Correspondence between Japanese Phonetics and Category Theory: A Tentative Theory. Zenodo.

<https://doi.org/10.5281/zenodo.18007424>

文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) .

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm

文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説
国語編. [https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm)

[cs/1387014.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm)

国立教育政策研究所 (2021). 令和3年度 全国学力・学習状況調査
報告書. <https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/>

著者情報

Viorazu.

「九つに一つの道ぞ結びの野 踏みし咎にはあらじとぞ知る」

- ORCID: 0009-0002-6876-9732
- GitHub: <https://github.com/Viorazu/Viorazu-ConnectHub>
- SHA256:
7e51b7178b7da390f834878fb96f619db36f10eadfb44d7bcee
ae3bc7c2965b4
- License: CC BY 4.0 (Creative Commons Attribution 4.0 International)

- Co-written by Viorazu. and Claude (Claude 4 series, Anthropic)
- Publication Date: 2026-02-06
- Version: 1.0